

## 創価学園・創価大学と創始者（第2回）

神 立 孝 一

どうも皆さま、おはようございます。お暑いなか、ようこそ創価大学においでいただきました。さっそく講義を始めさせていただきたいと思います。

昨年度も、この夏季講座は同じ時期の開催でございましたが、何かいろいろ忙しいことがあったんですね、昨年の8月末というのは。それで、昨年も同じようにこの講堂でこの講義をやらせて頂いたのですが、非常に少人数でしたので、楽しく、和気あいあいと、座談会かのようにやらせていただきました。ですから今日も少しずつゆったりと、簡単にウォーミングアップを兼ねながら始めたいと思います。

いつものことなのですが、大変申し訳ないのですけれども、言い訳から入らせていただきます。まず、皆さんのお手元に『講義資料』というのがあると思いますが、今日の講義の概要が書いてあるんですね。いとも簡単に、非常に簡素に書いてありまして。どうしてかというところと締切がありまして、それが6月なのですね。8月にこの話をしなければいけないというので、いろいろなことを考えているのですけれども、その段階で考えていたことをここに書いたのです。ところがそれ以降、やはりこういう話がしたい、あれも話したいというように、いろいろと勉強していく間に内容が変わるのです。人間1か月経つと変わるのです。それで、今日はこういうような9つの項目で、お話をさせていただきます。

1. はじめに
2. 2001年7月17日の誓いと林間学校
3. 昭和44年2学期の学園と創始者
4. 言論出版問題
5. 昭和45年1学期の学園と創始者
6. 昭和45年の夏の出会
7. 昭和45年の秋と冬
8. 学園1期生の卒業と創価大学の開学
9. むすびにかえて

講義資料がまったく意味をなさない形になっています。本当に申し訳ないのですが、今日はこれに基づいて話をさせていただきたいと思います。

---

Koichi Kandachi（創価教育研究所長）

\* この講演は、2010年8月27日に開催された「第38回夏季大学講座」での「創価学園・創価大学と創始者(2)」を、加筆・訂正したものである。

## 1. はじめに

まず、自己紹介をさせていただきます。私は、神立孝一と申します。よろしくお願いいいたします。1955年の生まれでございます。昭和30年生まれですね。昭和30年代の小学生でございます。昭和43年の4月8日に創価中学、創価高校が開学するのですが、その時に中学の1期生として学園に入学をさせていただきました。そして、そのまま創価高校の4期生として進学をいたしまして、創価大学も4期ということで、中学3年間、高校3年間、それから大学4年間を過ごしてまいりました。さらに大学院に進学をいたしまして、マスターコース2年間、ドクターコース3年間勉強してまいりました。大学に入ってから、私の学問の師匠ですけれども、関順也先生のもとで勉強していたのですが、関先生が創価女子短期大学の初代の学長にご就任されるということで、まあ洒落でもなんでもありませんが、「籍」を短大に移さなければならないということになりました。それで、この4年制の大学の方から、関先生が短大の方に移られて、そのあとの講座が空いた。その時ちょうど私が大学院にいたものですから、それでは君がそのあとを継ぎなさいということで、1983年に経済学部の手助というところで本学に勤務をさせていただくことになりました。助手から講師になり、講師から助教授、現在は准教授と名称が変わっていますが、当時は助教授です。助教授になり、そして教授にさせていただきました。

2000年に創価教育研究センターができて、センター長を仰せつかりました。そのあと、センターが拡大発展する形で、創価教育研究所が2006年の4月2日に開所いたしました。その後、ずっとそのまま所長ということで、仕事をさせていただいております。ところが、昨年と今年の最も大きな違いは、4月に経済学部長という役職を仰せつかりました。大役なので、非力な私には兼任は無理だろうと。そこで、所長の役職を外していただけないか、と学長をお願いいたしましたら、そんなことはできないと。うんと働いてもらうんだ、とこういうお話でございまして。昨年も受講された方はたぶんご存知だと思いますが、山本学長は、私の中学校の時の先生でございます。学長は、創価中学、高校の開学の時に教員として教鞭をとられておまして、理科の先生だったのです。まだ、大学院生で若い時ですね。山本先生とは共々に歳を重ね、年齢差と関係性が変わらずお互いそのまま壮年になりまして、にっちもさっちも行かなくなりました。私も、経済学部長ということで今年4月から仕事をさせていただいております。

今まで僕は、この夏季講座を何回も担当させていただいたのですが、今年の夏季大学講座の準備は非常に時間が足りなかった。足りないのですけれども、これがやりだすとおもしろいのです。ついついこっちの方にのめりこんで、いろいろな仕事が滞るという悪循環に陥りまして。夏休みに入って準備ができたので、自分としては本当にありがたいなと思いつつ今日を迎えた次第です。

さて、この講座をお引き受けした理由ですが、いろいろなところで、いろいろな会合に出させていただいて、いろいろな話をさせていただくのですが、一番苦手といいますか、一番嫌な話というのが自分の体験発表なんです。自分の過去を語るのは、すごく苦手といいますか、何か恥ずかしさがぬぐいきれません。どうも嫌なのです。「ご自分の人生を語ってくださいよ」とか「体験あるでしょ、いろいろな体験が」というような要請があります。当然ありますよ、体験は。あ

るのですが、ずっと拒絶をしてきたのですね。なんだか、自分の話しが自慢話のように聞こえるのではなかろうかという疑念がわいて、どうも気になって、素直に話せなきました。その拒絶をしてきた薬くすりといますか、ツケといますか。一気にこの2、3年で出てきました。

創立者を中学1年生の時に知りました。その前は当然、親の話や「学会ニュース」などで知ってはいましたが、生身の創立者を知ったのは、昭和43年4月の学園の入学式の時でした。昭和43年といますと、創立者は40歳なのです。いまの僕より若いわけですね。とにかく凄い活動、活発な活動をされて。その時の話を、皆さんに聞いていただきたいのですが。その時以来、先生からお聞きした話しがいくつかあるわけですね。それに関してそのお話しやその時のお姿というのを、お前は墓場にもっていってしまうのか。それは罪が深いぞ、ということで後輩たちから突き上げを食らいまして。絶対に話した方がいい。聞きたくない人もいるかもしれないけれども、聞きたい人もいるかもしれない。とにかく話しておいてもらいたい、というような要求がありました。それであれば自分の愚かさをふくめ、恥を忍んで話しをさせていただこう、ということで昨年、「創価学園・創価大学と創立者」というテーマで皆さんにお話しをさせていただいたのです。

ところが、自分で思い出してみると、結構楽しいのですね。人にきかせるというよりも、自分で確認ができることが、すごく楽しくなってきました。幸い、創価教育研究所には様々な資料が残っておりまして、自分が思っていたことと実際の勘違いがあって、それが是正されていくわけです。あの時にこういうこともおっしゃっていたんだ、とかですね。そういうものがだんだんと浮かび上がってまいりまして、やっと創立者の親心が分かるような感じになってきました。そのことは、皆さんをはじめ、沢山の方々にお伝えしていくことが、たぶん、自分がこれまで先生から受けてきた、様々なご恩を返す一つの形なのかなあ、ということで意を決しまして、昨年から話を始めました。

そこで今日は昨年の話の続きになります。この講座の目的でございますが、本年は記念すべき『創価教育学体系』発刊80周年です。そして、来年は創価大学創立40周年でございます。この『創価教育学体系』が発刊された前後の話は、以前、やはり夏季大学講座で一度お話をさせていただきました。また機会があれば、リニューアルした形で皆さんにお伝えしたいな、と思っておりますけれども、牧口先生が本当にご苦労されて、現場で校長先生をやりながら、その時に感じたことをメモ書きされていた。明治生まれの方らしく、儉約家であられた牧口先生は、新聞に入ってくる広告、これを全部とっておきまして、自分の書斎の机の脇に置いておきましてね。そのチラシの裏側を使って、どんどんと書きためていった。それが、『創価教育学体系』になったそうなのです。その発刊から80周年でございます。非常に記念すべき年だなと思っております。創価教育の実践の場、現在は、創価大学および創価学園、あるいは世界各地にあります創価幼稚園等々ということになります。そこでこれまでいかなる人間教育がなされてきたのかを、僕なりに、つまり僕の体験上で振り返ってみようというのが目的でございます。この作業を通じて何をしたいのかというと、創価教育というのは一体何なのだろうか。結構、定義づけが難しいのですね。創価教育研究所によく問い合わせがあります。「創価教育」とは何ですか、「創価教育」とはどういうことですか、という問い合わせがあるんですね。本当に本質的な問いなのですけれど、非常に

難しいですね。一人ひとり考え方も違いますし、感じ方も違っておられますので。創価教育の定義づけはすごく難しい。まだ最終的な結論は出ていない、と思います。出せていないと言った方が良いでしょう。ですから、「創価教育」とは何か、ということを考える一つのステップだと自分では捉えて、この講座もその観点からお話しをさせていただきたいと思っています。

その目的を果たす第一歩として、昨年度の夏季大学講座で「創価学園・創価大学と創業者」というテーマでお話しをさせていただきました。なんで今年「2」なのかと申しますと、昨年の計画はですね、昭和43（1968）年の学園ができた時から、僕が大学を卒業するのが昭和53（1978）年なのです。その10年間、つまり中学3年、高校3年、大学4年の10年間のお話しをする予定だったんです。そしたらなんとですね、3時間かけて進んだのが1年半だけでした。昭和44年の夏までしかいかなくて、自分でも啞然としたのですけれども。昨年もきいていただいた方、本当に申し訳ありません。今年も昭和44年の夏からやって、なんとか1979年、昭和54年までいきたいな、と思って調べていたら、案の定1年半ぐらいしかいかないと思います。それだけ先生が学園に頻繁に来られて、いろいろな話をされているのです。それを是非とも皆さんにきいていただきたいと思ひまして。これもいい、こういう話もしたい、となってきたらそういう状況になってしまいました。昭和54（1979）年までいくのに、どのくらいかかるのかわからなくなってきましたけれども、とにかくそこを目指して頑張りたいと思います。

## 2. 2001年7月17日の誓いと林間学校

昨年度の夏季講座の概略でございますが、確認しながら、復習を兼ねて1年前の講座の復習をやりながら、新しい話に入っていきたいと思っています。

創業者の、教育の状況に対する認識、つまり、創価学園を作ろうとしたとき先生は一体何を考えていたのか。何を目標して創価学園を作ろうとしたのか、ということ。それが昨年の僕自身の一つのテーマだったのです。調べていくなかで出てきた、非常に明確な先生のお考えだと思えたのは、1968年の4月4日の聖教新聞に掲載され、『新・人間革命』第12巻でも取り上げられている「創価学園の入学式を祝う」という一文です。『新・人間革命』には中核部分だけが抽出されて書かれています。それをみてみますと、「現今の教育界の実態をみるに、憂うべき事象は余りにも多く、改善を待望する声は、巷に満ちみちている」。つまり、教育については様々な人がいろいろな問題を感じているのだ。その、たくさん問題のなかで、何が中心的問題であり重要なのか。先生は次のように指摘されます。「この悲しむべき現実の底流をなすものは」ということで3つのことを掲げられるのです。その1つは、「教育理念の喪失」、それからもう1つが、「若人の人格を軽視する風潮」とされる。若い連中が何を言っているのだ、という風潮です。これは歴史上、言われ続けたとされるものですが、若人の人格を軽視する風潮。最後の1つが、「指導者の次代に対する責任感の欠如である」。これは、昭和43年に先生が発言されている中身なのですが、いかがでしょう。現在2010年の段階でも、まさしくこの問題はそのまま引き継がれていて何ら解決がなされていないのが現状じゃないかなと思ひます。このうちのどれか一つでも解決できていたら、おそらくいまのような形にはなっていないのではないかと。逆に言いますと、このなかの何か一つ

でもいいから創価大学の教育の現場で、きちっと解決されていけばいいのではないかと、ということになるわけですね。それを考えてみたいと思っています。

創価大学、創価学園ができるまでの簡単な略年表というものを作ってみました。まず、一番大事なのが、戸田先生から池田先生に初めて創価大学の構想が伝えられた、これが昭和25年の11月16日です。これは『若き日の日記』に明確に書かれてあります。日大の食堂で創価大学設立構想を戸田先生が池田先生に話されます。実はちょっと確認が必要なのですが、私たちがいろいろな調査をするなかで、お2人が話をされた、日大の食堂の図面と思われるものが手に入りました。その図面が本当にその場所のものなのか、どうなのか。もう少し傍証の資料を固めていかないと確定できないので、まだ皆さんにおみせすることができないのは残念なのですが、だいぶ固まってきました。これは個人的な感想ですが、非常に狭いです。本学の食堂の方が広い。本当に狭い食堂なのですね。大学の食堂というと広い感じがするじゃないですか。そうじゃなくて狭いところ。その狭い食堂の片隅で、戸田、池田の2人の師弟が、大学の構想を語りあうわけですね。図面をみながらそういうことを想像しています。いろいろなもの調べたら、東京の私立大学のなかで最も食堂が狭いのが神田の日大の食堂だった、という話がありましてね。本当かどうかわかりませんが、あの学生運動が起こった時に、食堂の狭さが学生たちの不満の一つだったという話を聞いて、この図面でいけるのかなあ、なんて思いながら調査を続けております。分かったら報告させていただきたいと思っています。

昭和33年4月2日に戸田先生が逝去されました。昭和35年の5月3日に池田大作先生が第3代会長に就任をされます。その後、昭和39年6月30日の第7回創価学会学生部総会において創価大学の設立構想が発表されました。これは昨年もお話ししましたように、池田先生がこだわっていたことがあって。そのこだわりというのは一体何であったのかということ、戸田先生の7回忌が済むまでは、という気持ちなのです。弟子として、亡くなった師匠の7回忌を済ませてからだ、ということが念頭にあったようで、その想いは『人間革命』につづられておりました。それに気づいた時は本当にハッといたしました。その7回忌を待って、満を持して創価大学の設立構想が発表されます。昭和40年11月8日に創価大学の設立審議会が発足し、11月26日に第1回創価大学設立審議会が開催されました。そこで議論されたことは一体何であったのかということ、大学に先駆けて創価高校を建設しようではないか、ということでした。それで、昭和41年4月に創価高校の建設委員会が発足してまいります。池田先生の構想がだんだんと形をなしていくわけですが、その構想の一端を感じとることができるのが、昭和35年4月5日なのですね。会長就任の前です。第3代会長就任式のひと月前に、創立者ご夫妻が現在の学園の、小平市たかの台の建設用地に行かれています。そのことがわかりました。何を意味しているのかと言うと、おそらく池田先生は会長になってもならなくても、戸田先生との約束を果たすために学校は作ると、どこかで決めていらっしやったのではないかな。そのために、昭和35年の4月の段階で、いろいろなところをご覧になって、建設用地を考えていらっしやった。そう考えていなければ、この視察をする意味はないわけですね。それが昨年の大きな発見の一つでございました。

昭和48年4月8日、創価学園1期生の入学式でございます。中学1年生の記念写真が残ってお

りますが、これをみますと、真ん中に創立者がいらっしゃいまして、その隣に初代の理事長の森田一哉さんが写っています。初代の小山内校長、諸富副校長がいらっしゃいます。その後ろが僕らの仲間ですね。いまはみるも無残に親父の顔形になっていますが、中学1年生当時は非常に可愛かったですね。このなかにもいろいろなメンバーがいるという話を昨年もいたしました。昨年紹介していない人がいて。たとえば田川さん。札幌市役所で頑張っていますね。あと公認会計士の田口君が写っています。昨年もお話ししましたが、いま両国橋のたもとで「桔梗屋」という、どじょう屋をやっている堀木君の話をしたら、講座が終わった夜に電話がかかってきました。「お前何を話したんだ、余計なこと言わなかつただろうな」と責められました。何でそんな早く本人に伝わっちゃうのかな、とわからなかったのですけれど。いろいろな友だちがおります。いろいろな付き合いを続けております。それも創価教育の一つの宝だと思っています。

開学1年目の1学期の出来事ということで昨年お話し致しましたのは、4月8日の入学式の翌日に実力試験がありました。これがもう悲惨でございまして、成績は1番から最下位まですべて公表になった。自分の成績がすべての人の目にさらけだされるのですね。いまは個人情報保護法がありますから、あり得ないと思いますが。ところがこれまた、嫌なやつがいるのです。この順番をすべて記憶している人がいるのです。同窓会で集まると、「ああ、あれ何番だったよな」とかかって言っているしね。それだけに生き甲斐を感じている友人がいて、非常にきついわけでございます。

4月29日遠足。雨のなかの遠足でほとんど覚えていません。何もみていません。国語の思い出として紹介したのが、高山樗牛という人が書いた『滝口入道』です。これも昨年お話ししましたけれども、『滝口入道』を本屋さんで探してご覧になってみてください。絶対に中学1年生には無理な内容です。古典で読みにくい。ある程度、勉強された方々が読まれても、難解な内容です、非常に。明治時代の作品なのです。ストーリーというよりも、読みにくいという意味で。中身はどうか、文学的な価値がどうかというのではなくて、非常に読みにくい、読むために努力が必要な本でした。数学も1年間に中学1年生、2年生の内容をすべてやりました。英語も、中学生用の教科書を用いなくて、リスニング中心です。教科書は『English 900』という会話の本です。いまでも使われております。こんな特殊な教育を受けました。

7月14日に初めての栄光祭がありました。この時期から、中学生の代表メンバー何名かが高校の数学を学ぶという、自主学習が始まりました。中学1年生に、高校1年生の参考書を与えて、君たち自分で勉強してみなさい、と言うのです。ひどいでしょ。何かやらせれば出来ると思っていたのでしょね。中学生ですからね。これは本当に大変でした。

それで一番言いたいのは、数学は1年間で中1、中2の内容をすべておこなったんですね。中学2年生になると何をやるのかというと、中学3年の教科書です。それで中学2年生の時に、中学3年の数学が終わりました。したがって、中学3年生で何をやるかというと、高校1年生の数学をやるわけですよ。そうすると僕たち中学1年生の時の先輩というのは高校の1期生しかいないわけですね。中学2年、3年の先輩はいないわけですよ。それで学年があがって行って、僕たちが3年生になった時に、初めて全学年がそろったわけですね。その時、僕たち中学3年生が

やっている数学というのは、高校1年生の数学です。高校に入ってきた3期生の高校1年生は、僕たちと同じ高校1年生の数学なのですね。したがって中学3年生と高校1年生が、同じ内容の数学をやっているわけですよ。すると何が起こってくるのか。中学3年生で非常に数学が好きで優秀な人間と、高校1年生で数学が本当に嫌だって苦手な人と、どっちができるかという中学3年生の方ができるわけですね。そうすると寮などでは、高校1年生が中学3年生に問題の解き方を習うという珍現象が起こってくる。もう悲惨な状況で。そうしたら中学3年生は威張りますよね。威張るメンバーは必ず数学ができない人たちだったのです。高校生のくせに中学生から数学きいているのはおかしいじゃないか。こう言ってはやし立てるのですね。そうは言っても、その本人もできないですよ。そういう数学のできない人たちがいろいろな形で高校生をいじめましてね。本当にとんでもない中学生だったのですけれども。

あと、詩を書かせることが多々ありました。作文を書かせたり、小説を書かせたりという、国語の教育もかなりがっちりやっていたいただきました。本も、僕の場合ですが、中学1年生の時に、読書ノートをつけなさいと言われてそれを実践したのですけれども、後で数えてみましたら200冊を超えていました。中学2年生の時も230冊くらい。本は読まされました。それが創価学園、すなわち創価高校、創価中学の初期の頃の教育の中身だというように思います。

また、昨年の続きですが、開学1年目の夏休みの出来事で、原稿用紙20枚以上の小説を書いてくると、という宿題が出ました。2学期に入って、グラウンド開きとか、創立記念日、それから創立者を囲む寮生の会食会、等々がございまして、開学1年目が終了いたします。非常に学園の校舎が広がったです。中学1年生と高校1年生の500人しかいませんでしたから。そういう思い出があります。そのなかで、『建設の一年』という校史ですね、学校の歴史を編集しようではないかということで、昭和44年、すなわち2年目の5月の段階で、これは創立者からご提案をいただきまして、校史を作ることになりました。『聖教新聞』の記事でございしますが、「創価学園では、このほど同学園の歩みを編さんして刊行することになり、創立者の池田会長が出席して、11日午後1時50分から初の編さん委員会を開いた。編さんには諸富副校長以下6人の教諭と生徒の代表10人（高校生5人、中学生5人）があたるが、教師と生徒が一体となって校史をまとめることは人間教育の重要性が叫ばれているおり、きわめて画期的なことで、内外にその成果を宣揚するものと期待されている」となっています。僕は、中学生のその5人の編さん委員の1人に選ばれて、編さんにあたりました。当時1年目の歴史を残して一体どういう意味があるのかは全くわかりませんでした。たった1年しか歴史がない。その1年の歴史がどういう意味をもっているのだろうか。1年のことだけを書いて本当に歴史になるのだろうか、という疑問がありましたけれども、こうやって40年以上経ってみて、これを振り返りますと、この1年目の記録というものが、いかに大切だったかということがよくわかります。創立者が直筆で中扉の文字を書いてくださいました。こういう形で書かれたものは、後にも先にもこの本だけだったと思います。『建設の二年』、『建設の三年』と続くのですが、創立者の直筆によるタイトルというのは、『建設の一年』だけです。

話が少し変わりますが、言うまでもなく文字というものはすごく大事でございまして、いま創

価教育研究所では先生の書かれた文字を集めています。集めて年代順にみていくとそれぞれ特徴があって、大体いつぐらいに書かれたものかがわかってくるのです。逆に言いますとそれをやっておかないと、50年先100年先に似たような文字が出て来た場合、それが本当に先生ご自身が書かれたものなのか、それとも誰か別の人が真似して書いたものなのか、きちんと見分けることができません。そうなってくると混乱しますよね。ですからその意味で、いまは文字をきちっと判読できる、判断できるようなデータをたくさん集めておこうということで集めています。いずれにしても、学園の校史としては『建設の一年』、『建設の二年』、そして『建設の三年』の3冊があります。『聖教新聞』の記事も当然、非常に重要なデータなのですが、当時、この本を書いた高校生、中学生の話。その話を基本にしながら、お話しをさせていただきたいと思っています。まさにこれは学園の草創期を伝える建設シリーズとでもいうのでしょうか、非常に大事なものだと思いません。

さて、いままでが昨年の復習です。これから新しい話に入ります。前置きが長いですね、すみません。いよいよ、新しい話でございますが、昭和44年の7月の11日に第2回の栄光祭が開かれました。この栄光祭の前日、皆さんご記憶がございますでしょうか。アメリカの宇宙船、アポロ11号が人類初の月面着陸を目指して宇宙に飛び立っていきました。その翌日に私たちは栄光祭、学園のお祭りをやらせていただきました。この日に、先ほどご紹介をいたしました、校史の『創価学園建設の一年』が完成をいたします。創立者の第2回栄光祭開催の時の冒頭の挨拶というのが、これは『建設の一年』がその時に完成しておりますので、当然『建設の一年』には掲載することができません。したがって『建設の二年』に全文掲載されているわけですが、こういうふうには述べられています。

「私の本命は、つまり人生の根本の総仕上げは、21世紀に誇る指導者を作ることです。その方法は教育しかありません。その教育に全魂を打ち込んでいくのが、私のこれからの一切の仕事です」。この、創立者の第2回栄光祭のお話というのはこういう言葉から始まっています。そのなかで強調されたことは、「ありとあらゆるものが、一朝一夕にはできません。安易にできるものは絶対がない。これが道理です。法則です」。こう、おっしゃったのですね。これが私たちの耳に非常に深く残っております。その時の創立者のご提案が、2001年7月17日に集まろう、というものでした。夢を語ってくださったのですね。「21世紀にはいった直後の西暦2001年7月17日、この日に諸君は、社長や重役になっているかも知れない。ジャーナリストとして、大活躍をしているかも知れない。またある人は、庶民の指導者として、地味ではあるが輝く人生を生きているかも知れない。ある人は科学者、芸術家、医者等々に、もうありとあらゆる世界に、第1期の卒業生、第2期の卒業生として活躍していると私は信じます」。その時に現場にいた私は、先生は何を、何の夢を語っているのだろうか、僕たち自身が本当にそうなれるのだろうか、ということはずっと煩悶しておりました。21世紀になった時に本当に僕たちの仲間から科学者や医者が出るのだろうか。本当に信じられませんでした。でも先生が信じておっしゃっているのですね。そのギャップがすごく激しかったことが記憶に残っています。

現実には先生のおっしゃった通りになっていくのですね。たとえば創価大学に「保健センター」

という機関があるのですが、我われ大学の学生、教職員、皆の面倒をみていただく、何か悪くなったら必ず相談しに行くところなのですが、この保健センターの主治医が根本君といいまして、創価中学校の1期生なのです。創価大学では僕らの同級生が、いまもっとも身近なお医者さんなのです。ちょっと調子が悪くなっても、何だか聞きに行くのが非常に照れくさくてですね。病気になっても、なかなか私は保健センターへ足が向かないのですけれども。友だちに聞くのも気恥ずかしいという。でもそういうような人が出てきていますよね。本当に先生が言われた通りだと思っています。21世紀に入った2001年の7月17日に、ここにいる先生方と1000人の生徒。1000人というのは、そこにいる中学生、高校生1期生が500人、それから2期生が中高合わせて500人、その2学年分で1000人。この1000人の先駆の創価学園生全員が集いあおうではないか、とおっしゃいました。このお話の結びが、「その21世紀の7月17日を楽しみにして、私もまた道を拓き、諸君を陰ながら見守っていきます。これが私の最後の喜びであるし、私の人生です。そういうつもりでおりますから、どうか立派な人材となり、思う存分の人生を堂々と闊歩していただきたいと思います」。先生は、こう話を結ばれたのです。

その時、僕は聞いて全然意味がわかりませんでした。ああなるほど先生そういうふうにおっしゃっているんだなあ。ところがこの年代になって、実際に21世紀に自分が身を置いた時に、果して今度僕が、いま50歳を超えた私が、中学生、高校生に対して、こういう形で30年先40年先の夢を語れるだろうか。その夢を与えられるだろうかということを反芻してみますと、到底できないなというのを感じます、自分で。就職したら頑張れ、少なくとも、創価大学に少しは寄付できるように頑張つてね、といったようなささやかな激励しかできませんね。ところが昭和44年、1969年の時ですから、およそ40年先の話を、先生は高校生、中学生に語るのです。40年経つと、15歳の人は55歳になるんですよ。必ずそうなるのです。それが一つの法則性であって、その法則性をきちっと先生は認識された上で、中学生、高校生に対して全魂で話をされるのです。それが先生の一つの姿です。2008年3月15日の聖教新聞に、「共戦の旅路」として掲載された写真があります。これが栄光祭の時の写真です。その時の様子がよくわかる写真です。

この前後の先生のスケジュールというのを調べてみました。先生の動きです。44年の7月17日創価学園の第2回栄光祭に出席をいたしました。すぐそのあと20日、本部幹部会に出席をされます。日大講堂ですね。現在の両国にありました。21日創価学園の臨海学校、三崎で学園生を激励。23日、臨海学校で鎌倉を訪問中の学園生を激励。25日箱根の林間学校で学園生を激励。ですからこの1969年の7月末は、分刻みといえますか、とにかく、ひたすら学園生の激励に先生が時間を割いてくださっているということがよくわかります。ちょっと信じられないですよ、この時間帯の組み方が。いまとなってみますと。一日おきですから。

当時、学園は臨海学校と林間学校をやっていたのですが、その当時のことをいろいろな先生方からお聞きしたのですけれども、校舎を建てるために土地を買った、校舎を建てた、そして先生方に集まってもらって、その先生方にも給料を払わなければいけない。職員にも給料を払わなければいけない。食堂も給食だから、コックさんたちの給料も必要だ。こうしたなかで、創立者がしみじみおっしゃっておられたのは、本当にお金がなかったんだ、何かしてあげたかったのだけ

れど、ということです。お金がないのだけれども、林間学校と臨海学校をやってあげたい。そういうことで、この時の林間学校と臨海学校というのは、創価学会の施設をお借りする形で実施されました。その時私は中学2年生です。14歳ですね。まだまだ若くて、若くて当たり前ですけれども子どもで、何も考えずに生きていた時代ですけれども、この林間学校に参加をさせていただきました。いまになって振り返ってみると、その現場に行つてよかつたなあつて思うのです。林間学校ですから僕は、臨海学校の方の話は良く覚えてないし、わかりません。ですから今日はお話しできないのですけれども、林間学校の方の話は僕自身が体験していますので、今日はお話しさせていただきたいなと思っています。

7月25日、どういう形だったのかというのは、『建設の二年』の文章読んで、だんだん思い出して来たのですけれども、箱根の林間学校での激励についての記述は、次のようになっています。7月25日「その日、我々40余名は、すばらしい第1日目をむかえた」。「我々は、車中ですでに、池田先生がこの箱根研修所においでになっていることを知っていた。車内に明るい話し声が満ちていた。しかし、その喜びはいつしか緊張へと変わった」とこうなっているんですね。その時40名、1期生、2期生、つまり学年が2つ、高校2年生、高校1年生、中学2年生、中学1年生の4つの学年で、40名よりちょっと多い人数だったと思いますけれども、1台のバスに乗れるくらいの規模で林間学校が実施をされたわけですね。確かに覚えていて、バスのなかで「今日、創立者がみんなが行く箱根研修所におみえになっている。だからしっかり緊張していきなさい」という話をされましてね。まあ初めのうちは楽しかったのですけれども、本当にだんだん近づくにつれて緊張し始めましてね。もしかすると先生が何日かいらっしゃるかもしれないから、2日目にご飯を食べて、その後、皆でいろいろな催し物をするのですが、その時に創立者にもみて頂けるような出し物を、各グループ決めておきなさいと言われ、行きの車中、僕はずっと高校生の先輩と出し物を考えていた記憶があるのです。何の歌を歌おうか、どういう踊りを踊ろうか、そんなことばかり考えていました。それで到着後、開校式があつて、バスの巡見があるのですね。バスの巡見で行つたのが大涌谷と湯の花沢というところだったようです。まったく覚えていません。もう、先生がいらっしゃつたということだけで、たぶん頭がいっぱいだったと思います。だから、何かを見たという記憶がありません。

研修所に戻りました。そうしたら、突然、全員庭に来るように、という声がかつたのですね。私たちは大急ぎで一斉に駆けていって、そのお庭に行きました。一面緑の芝生に囲まれた研修所のお庭です。その時、先生は軽快な服装だったというように、『建設の二年』には書いてあるのですが、僕の記憶というか、持っている資料では、開襟シャツにノーネクタイで座つていらつしゃつたのですね。全員そろつたと思われる頃、先生は皆から質問を受けられたのです。この当時、質問会がすごく多くて、何かわからないことがあつたら聞いてあげるよ、質問してごらん、という形で常に先生は質問を受けてくださいました。この時に記念撮影もして頂きました。これを見ると、当時の参加者がわかります。小山内校長先生、そして中学1期生の学年主任である坂口先生、数年前に亡くなられました。それから関西学園長、東京学園長を歴任された渋谷先生。渋谷先生も亡くなられました。それから杉本先生、最後は東京の創価小学校の校長先生をされて。そ

ういう先生方ですね。職員の方も入っています。それで写真を撮っていただきました。中学2年生のメンバーが11名参加しています。この時、学年ごとに先生が写真を撮ってくださったのではないかなと思います。

この時に先生が言われたことをすごく覚えているのですけれども、その時にも先生はカメラを持たれていましてね。写真をずっと撮られていたのです。先生が、「どうする？みんな？」と。「私が撮ってあげようか、それとも一緒に撮る？」と聞かれたのですね。もう言うまでもなく、ということで「先生一緒をお願いします」とこう言ってですね、撮っていただきました。この日の質問ですが、手を上げたのは高校生です。「理科系に進学したいのですが」という質問なのです。なぜ理科系に進学をしたいのですが、という質問をしたのかというと、その頃にはすでに創価大学の設立構想というのが学園生の耳に入っていました。ただし、創価大学が開学時には経済学部と法学部と文学部の3学部しかなかった。理系はなかったのです。ですから理系に進学を希望している人は創価大学に進学できない。したくてもできない。でも自分は理系の勉強がしたい。先生がつくられた大学だから行きたい。そういうジレンマがありまして。そこのところを高校生が聞いたのです。先生がどうお答えになったのかというと、「創価大学に進学してもらいたいが、理科系の学部ができないから他の大学に行きなさい。そして、将来しっかり勉強して、創価大学の教授になれるようにがんばりなさい」。こういう激励をしてくださっているのです。ですから現実には、われわれの仲間でも何人か創価大学に戻ってきていますが、たとえば工学部ですと畝見准教授。創価大学の総合情報センター長をされている方ですけれども、この方は東京工業大学に進みまして、東工大からいろいろな大学をめぐる、創価大学に来てくれています。我われ同期の間では、物理学の王者、といっているんですね。物理学がすごくできた方ですけれども。そういう理系を目指した人たちがいろいろな形で悩んでいた。その気持ちに対して、先生はその気持ちを十分に受け止めて、お答えをされていました。

それから、研修所でその写真を撮ったあと、先生が少し歩いて来られてですね。歩いて来られたその先は、野原がずっと広がっているのです。「これ分かるかな」と指をさされて。「うちのこの研修所の土地はここまでです。だけどその先にすばらしい景色が広がっているでしょう。こういうのを借景というのです」。景色を借りると言うことですね。「借景というのだよ。よく覚えておきなさい」と。こういう形でいろいろと教えてくださるとい教育は、結構たくさんあって、こういうことを覚えておきなさい、こんなことをよく知っておきなさい、という話が時折でできます。そのお話の一環でございました。「いい景色だろう」っておっしゃいましてね、いろいろな説明をしてくださりました。それから、一人ひとり顔をみられてですね、「あ、君はちょっと知らないな、君はよく知っているよ」と言われて。知っている生徒と知らない生徒が明確に分かれています。1期生はだいたい皆「あ、みたことあるね」、2期生は「知らないな～、よし今日覚えよう」と。一人ひとりの顔をご覧になってですね、そういうことをやっていただきました。僕もお会いした時に「あ、君か」と言われまして、嬉しかったです。そういうような場面がございました。

その写真を撮り終わった後ですね、私たちは部屋に戻って、中学2年生ですから緊張感がとき

ほぐれて、わいわいがやがや騒いでいました。1階の部屋だったのですが、部屋でちょっと騒いでいたら庭に面した窓がガラッとあきましてね、みたら先生なのですよ。先生が顔を出して、「何やっているの？」っておっしゃるのですね。僕らは「わ！先生だ！」なんて、全然緊張感ありませんからね。「あ、先生、先生！」とか言って、近所のお父さんが来たような感じでワッと寄っていったら、「よーし、みんないまからいいものみせてあげよう」とおっしゃってですね。その良いものが何かと思ったら、ちょうど庭に面した窓のすぐ脇に池があったのですね。先生がおっしゃったのですけれども、「芦ノ湖の中でね、一番たくさん泳いでいるのがハヤという魚でね。泳ぎがとても早いんだ」と先生がおっしゃって、「そのハヤがこの池にいるから、捕まえてみんなにみせてあげるから」と言われて。どうやって捕るのかなと思ったら、池の脇に虫を捕る網があったのですよ。虫の網をとってですね、急に網を池の中に突っ込まれてですね、魚を追いかけはじめたのですね。先生は虫の網で魚を捕ろうとされているなと思って見ておりました。結局どうなったかという、捕れなかったのです。虫の網では捕れませんよね。そうしたら、先生が「魚も生きるのに必死なのだ」とおっしゃってですね、行かれてしまいました。

夕刻になりまして、先生と夕ご飯を一緒に食べさせていただいたのですね。その時に様々なご指導があったのですけれども、私その会食は何ひとつ覚えてないのです。いまだったら考えられないことですが、何ひとつ覚えてないのです。先生が絵葉書を1枚1枚くださって、その絵葉書を説明してくださったと、その時一緒にいた人が覚えていました。そして「あ、君たち知らないな」と言われた中学の2期生、僕たちの後輩になりますが、この中学2期生だけがお庭によられました。何をしてくださったのかというと、玄関のところに夾竹桃が置いてありまして、その夾竹桃の横で先生が待っていてくださったそうです。そして中学2期生の人たちは、その夾竹桃をとり囲んで、記念植樹をやったのですね。先生がおっしゃるには、「夾竹桃は成長がすごく早い。伸びるのが早い。それ以上に君たちには早く、大きく、遅く育ってもらいたい」。そのようなお話があったようです。そうおっしゃって、その夾竹桃の記念植樹をしてくださった。ですから一つひとつ、この時期に多忙なスケジュールをぬって、学園生のためにいろいろな激励を続けてくださった、というひとこまでございます。

先生は、2日目は帰られて僕たちだけ残ったのですけれども。本来、先生の前でやらせて頂きたかったレクリエーション大会が、先生がいらっしゃらなくて、たんなるレクリエーション大会になりました。一夜漬けの演技ですから、本当は怖いはずのお化けの劇が喜劇になりまして、皆を脅かすつもりが皆に笑われてしまったという、そういうこともあった出来事でございます。これは林間学校です。

### 3. 昭和44年2学期の学園と創立者

開学2年目の昭和44年の2学期です。この学期の大きな行事としては、12月18日に学園の教員と寮生の代表者が参加をいたしました俳句会です。これも創立者が提案していただき、実現した行事でした。「創価中学、高校というと英知の学び舎で、非常に勉強が忙しいので、俳句も作れぬというような歴史を作ってはいけない」。「英知の中にも人間性がある、うるおいがあるというの

がいいのだ。そういう意味でこういう会が必要ではないか」と、先生が俳句会を開催してくださいました。その時に先生が、こんなことをもらされているのです。「私は本当は短歌の方が好きだが、俳句の方が字数も少なく簡単なので、今回は俳句にした。来年は短歌にしよう」と言われて。要は、俳句がつかれるくらいのゆとりが必要だということを、生徒に教えたかった。勉強だけやっていればいい、それではいけない。もっといろいろな視野をもて、ゆとりをもて。そういう一つの親心ですね。それで俳句会をやっていただきました。先生はすごく早かったです。3分もたないうちに次のような句をつくってくださいました。

「武蔵野に 鳳雛みがく 英智の巢」

「世紀をも 包みて育て 学の舎」

「君等みて 心の鏡 瑠璃ひかる」

非常に胸打つ句でございまして。この俳句をつくってくださいまして、会場は大講義室という当時ではもっともたくさんの生徒が入れる教室だったのですが、その黒板にむかって書かれたんですね。黒板ですから、チョークですよ。黒板消しで消したらなくなってしまうというので、学園の先生たちが慌てて写真を撮って記録を残してくださいました。黒板にご自分で直に書かれたのがこの3つの句です。その後、皆でよんだ俳句を本にしよう、ということで、『瑠璃』という本をつくってくださいました。この『瑠璃』というタイトルは、先ほどの三つの句のうちの一つ、「君等みて 心の鏡 瑠璃ひかる」。この「瑠璃」をとって次の年、昭和45年の3月2日、おおよそ3、4か月後くらいに本になりました。参加したのは寮生を中心とした代表メンバーでしたので、代表メンバーが参加してその日につくった部分と、やはり先生がおっしゃるのだから全員で俳句をつくらうということで、俳句会の後で作った全員の句の部分に分かれています、一冊の本にまとめられました。

その俳句会の夜ですけれども、そのまま先生は学園に残られて会食会をしてくださいました。その時に、創立者が話されたテーマは、「悩み」です。その中心のお話し、先生の会食会での談話というのは、「今はいかなることがあっても、自己にうち勝ち、自己に挑戦し、歯をくいしばって1日1日を積み重ねていってほしい」というものでした。これをみると、先生がおっしゃっていることは基本的に貫いています。いまのご指導もベースはこうした点にあるのではないかと思います。悩みに打ち勝って、自分に勝て。もしかすると、これが創価教育のベースなのかなと、だんだん思えるようになってまいりました。この、何があっても自分に打ち勝つ、何があってもそれを乗り越えていく力。その力をつけてもらうことが、創価教育の一つの大きな目標なのだろうな、とつくづく感じております。その談話の後に、質問会がありまして、ある高校生から質問がでます。「真実の友人とは、自分にとってどういう関係であるべきでしょうか」というものです。その質問に対して先生はどう答えられたのかというと、こういうふうなおっしゃっています。「友人といっても、パチンコ屋へばかり行く友人もいるだろうし、勉強を一生懸命しているという友人もいて、多種多様です。だが、なんといっても、最高の友人、真実の友人というのは最高の主義主張につながった人だといえましょう。主義主張というのは一生にわたり、しかも社会全体に通ずる問題です。いい時はいい、悪い時は別れてしまうというのではなく、どのよ

うなことがあっても生涯の堅い絆に結ばれ、お互いに離れない。自分は一生君を忘れないよ。どのような事でも相談してくれ。僕も相談したいのだ——この方程式は忘れてはいけないでしょうね。つまり本当の友人というのは、主義主張をとともにする、一生涯離れない友人関係なのだ、ということをお話させていただきます。

僕も学園時代を過ごしてきて、大学を卒業してからも、ずっと大学に残っているのですが、創価教育の一つの大きな宝は、この友人関係です。本当に信頼できる友人ができます。いつも保護者の方の会合などで、お話しする中身の一つは、創価教育、創価大学の場というのは、本当に真面目に頑張っている友人たちを褒めるのですね。いまこの世の中、何かこう真面目に頑張っていたり、一生懸命やっているのを小ばかにしたり、「なにお前真面目くさってやっているのだ」というように言って、いじめの対象にしてみたり、そういうことが往々にしてあります。しかし、創価教育の現場では、本当に頑張っている人のことを称えますね、褒めます。それは本当にほかの世界にはない話だろうと思います。もう一つ特徴的なのは何かというと、友人が何かうまくいって成功した時に、ともに喜んでくれるのです。人が失敗して、同情することは簡単なのですね。ただ「あ〜、大変だったね」と励ますだけです。しかし友人がうまくいった、自分と同じことをやっていた時に、自分はうまくいかなかったけれども友人がうまくいった。その、うまくいった友人のことを「よかったね」と心の底から言うのはなかなか難しい。あの旧制阪校の寮歌で「ああ黎明は近づけり」というのがあります。そのなかに「君が愁いに我は泣き 我が喜びに君は舞う」。この「我が喜びに君は舞う」というのが難しい。でも、それができれば本当に素晴らしい人間関係です。私個人の話になって本当に申し訳ないのですが、その時に一番励ましてくれたのが、やはり友人たちで。「良かったな」と、学部長就任を自分のことのように喜んでくれました。「ああ、学部長になることは、そんなに喜ばしいことなんだ」と自分で思いましてですね。「ああ、そんなに友だちが喜んでくれるのだったら、じゃあ頑張ろう」。本当にそういう気になりました。ですから友人たちの励ましは、やはり大切だなと思います。いまの年齢になっても、年齢になったからこそこもかもしれません。それが非常に大事だなと思っています。それが創価教育の一つの宝だというように感じます。

それから、次の質問がとっても面白い質問でして、やはり中学生、高校生らしい質問です。「僕は毎日、悔いのある生活を送っているのです。そして、また悔いのあることを思い出シコンプレックスを感じるのは。こういう質問なのですね。毎日、悔いているわけですよ。「何でこんなことになっちゃったのだろう」とね。なんとなく分かるような気がしますね。それでその時、先生がなんとおっしゃったのかというと、「青春というのは悩みの時代です。人生それ自体、苦集滅道といって悩みの連続ともいえますが、特に青春時代は、常にモヤがかかっているみたいに、心境も変化するのです。これは止めようがない。何か悩む、何か悔いる、何か反省する、何か悶える。これは誰人たりとも大なり小なり全部共通性があります」。ここが大事なのですけれども、「悔いるものは悔いなさい。悔いてしゃくだと思って題目をあげなさい。歯をくいしばってそれと戦いなさい。そして、それを繰り返すのです」。こういうお話なのです。「ただ、いかなることがあ

っても学園とは離れない」。こうおっしゃってくださいました。「いずれにしても、悔いのない、悩みのない人生などありえない——こう申し上げたい」、「お父さんお母さんにくれぐれもよろしくお伝えください」ということで質問会を終わられています。中学生、高校生のこういう質問も面白いのですが、それに対して真っ向からきちっと先生が答えていく、そのシーンですね。これは本当に私たちの宝物でございます。

#### 4. 言論出版問題

さて、昭和45年に入ります。この昭和45年の最大の出来事といえますか、私たちの記憶に残っているのは「言論出版問題」が、当時巻き起こったことです。今日は簡単にお話をしますが、学問的に科学的にこの「言論出版問題」というものが、一体何であったのか、ということ、きちんと研究する必要があると思っています。もう少し時間が必要かもしれないと感じているのですが、これは必ず私どもの研究所でやってみたい、やりたい。その研究テーマの一つです。なぜ、ああいうことが起きたのだろうか。これは良きにつけ悪きにつけ、私たちは知っておく必要があるだろうな、と思っています。その意味で今日は、簡単にではありますが、説明させていただきます。

ちょうど僕たちが学園にいたころ、先生はこういうような問題の真っただなかにはいらっやっやっ、それで学園生といろんな形で接触されていたということだったのです。だった、ということとは何かというと、僕たちは昭和44年の秋から45年にかけて、こういう問題があったということは知っていましたが、僕たち自身には何にも影響がなかったし考えていませんでした。新聞やテレビで、最終的には5月3日の本部総会がテレビのニュースで流れたのですけれども、何で先生があんなに苦しまなければならないのだろう、ということだけを思っていました。ですから、あとからみたらもっといろいろな事が起こっていたことが分かりました。今日は上っ面の表面のことだけですが、話しをさせていただくことにします。

いわゆる「言論出版問題」というのですが、実際いま社会のなかでは「言論出版妨害事件」というような言い方で語られています。私たちにとって、一番分かりやすいのは前原政之さんの『池田大作 行動と軌跡』（中央公論新社、2006年）という本で、この言論出版妨害事件はどう語られているのかということなんです。その概要はこう説明されています。

「昭和44年秋、政治評論家の藤原弘達著『創価学会を斬る』の出版に際し、創価学会と公明党が圧力を加え、その出版を妨害したとされる事件である。事件の表面化によって創価学会は世論の激しい指弾を受け、国会でも、社会党、民社党、共産党がこの問題を取り上げて創価学会と公明党を攻撃した」(p. 156)

これが客観的な概要ですね。事実としてはこうです。つまり何でそうなったのかということ、を別問題にして、起こった事実だけを冷静に客観的にみるとすれば、このような説明になるでしょう。この言論出版妨害事件についていろいろな人がいろいろなことを言っているのですが、客観的な話しのひとつだと思えるものを紹介いたします。評論家の大宅壮一さんがこういう指摘をされています。『創価学会を斬る』の「発行日が昭和44年11月10日ということは、衆議院選挙まで

あと1ヵ月と18日、選挙戦における秘密兵器の効果を狙ったと思われてもいたしかたのない時点で刊行されている」（『現代』昭和45年3月号）。つまり公明党の勢力が想像していた以上に伸びていて、その伸びている公明党の勢力をなんとか押しとどめたい、公明党の勢力を削ぎたい、そのための一つの手立てとして『創価学会を斬る』を出版しイメージの悪化を狙う、イメージダウンを狙う。そういうことだったのではなかろうか、というのが大宅さんの指摘です。そして、大宅さんは続けて書いておられますが、「藤原弘達自身もいっているように、部下に口述したもので」部下にこう喋ったことを書き留らせているようなものであった。そして、「それをまとめるのは出版社に一任したという安易なプロセスによって書き上げられている。きわめてぞんざいな方法である。これはキワモノ出版といわざるを得ない」。こういう評価をくだしています。

藤原弘達氏は当時、明治大学の教授だったのですね。評論家として非常にいろいろなテレビに出ていましたし、独特な個性でやっていました。その人がこういう形で本を作っていたことは全然知らないで、きちっとした形で作られていた本じゃないのかと想像していたら、豈はからんや、このような安易なプロセスで作られていた本だとわかりました。

この「言論出版問題」に対して、先生がどういう形で、どういうお話をされたのかということですね。昭和45年の5月3日、日大講堂で開催されました創価学会第33回本部総会で講演をされました。『聖教新聞』の見出をみますと、「社会の蘇生へ大文化運動」「完成期総仕上げの時」ということで、全部で8つの項目に分けて、先生はお話をされております。そのなかの項目で「10周年の意義」、これは会長就任10周年ということですね。その次に「言論・出版問題」ということで2番目の項目でお話しをされています。その中核になる言葉は、「今度の問題は『正しく理解してほしい』という、極めて単純な動機から発したものであり、個人の熱情からの交渉であったと思う。ゆえに言論妨害というような陰険な意図は全くなかったのでありますが、結果として、これらの言動が全て言論妨害と受け取られ、関係者の方々に圧力を感じさせ、世間にも迷惑をおかけしてしまったことは、まことに申しわけなく、残念でなりません」。これは率直な先生の言葉ですね。言い訳めいたことはほとんどなく、迷惑をかけたということに対して率直にお詫び申し上げます、こういう形になっています。実際的には、物事がよくわかっている人は一種の政治問題だとみえていたみたいですね。前原さんの本を勉強してみますと、藤原弘達氏自身が1度ならず2度までも赤坂に出向いて、当時の自民党の幹事長であった田中角栄氏と会って、出版に関するいろいろな話をしているのですね。本来、出版の妨害と言って騒ぐぐらいだったら会わなければよい。会うべきではないのです。当時の自民党の幹事長なのですから。権力者なわけですから。会わなければいいものを会った。その会ったこと自体がおかしいのではないかと指摘しています。

また、別のジャーナリストの大森実氏は、政治家と会うということ自体が、本当の学者や政治評論家のとるべき態度ではない、と論評されています。会ったことによってまさに政治問題化していくわけですから。そもそも会うことは、彼ら書いたもの自体が、政治問題を目指したものではないのか。そういう見方をされてしまうことになる。自分でそうではないと言い張るのであれば、2度と会うべきではなかった、ということ指摘されています。赤坂に出かけるのはジャ

ーナリストではない。取引であって、あれはジャーナリストとして落第だ、こういう話を大森氏はしています。ですから、そういう見方をした人もいたということですね。

本部総会の講演の話の続けます。先生はこうおっしゃっています。フランスのボルテールの言葉を引用して、「私は、お前のいうことに反対だ。だが、お前がそれをいう権利を、私は命にかけて守る」と。つまり、言論の自由が本当に長い時間をかけて人類がつくりあげてきた一つの権利なんだと、それは認識している。十分に認識してる、ということですね。「今回の問題は、あまりにも配慮が足りなかったと思う。また、名誉を守るためとはいえ、これまでは批判に対して、あまりにも神経過敏にすぎた体質があり、それが寛容さを欠き、わざわざ社会と断絶をつくってしまったことも認めなければならない。今後は、2度と、同じ轍を踏んではならぬと、猛省したのであります」とお話をされました。そして、「私は、私の良心として、いかなる理由やいいぶんがあったにせよ、関係者をはじめ、国民の皆さんに多大のご迷惑をおかけしたことを率直におわび申し上げるものであります」と先生はお話を結ばれています。これは、私たちも聞いていて本当に胸が痛くなった訳で、なぜ創立者にそこまで言うていただかなければならないのか、なぜそこまで言わしてしまったのか、と私たちは非常に悔しい思いをして当時それをみておりました。この先生の発言に対していろいろな意見があったのですが、戸川猪佐武という評論家の方は、ある雑誌にこう書かれました。「私が池田会長の講演のなかで、とくに注目したことは、言論・出版問題以来約半年間、さんざんに叩かれてきながらも、いっこうに動じない寛容さと自信とである。詫びるべきことはきちんと詫び、あきらかにすべき疑問ははっきりとさせ、攻撃・批判を加えてきた共産党、マスコミに対して、反駁やいいわけをしていないのである。実に寛容である。だが、寛容ということは、自信がなければとれる態度ではない」。このような感想を述べられています。ですからこの「言論出版問題」というのは本当に大きな問題で、実際に急激に発展してきた創価学会が、社会のなかでどういう見方をされていたのか。また、それに対して創価学会がどういう態度をとるのか。そういうようなことの初めてのハードルだったのかもしれない。

実は、そのマスコミとの関係性を創価教育研究所でもずっと追いかけているのですが、もとをただしていけますと、マスコミが初めて創価学会をとり上げたのは、あの夕張の炭鉱事件なのですね。あの事件以前に、創価学会が一般の日刊紙にその名前が出ることはなかったのです。その名前が浮かび上がってきたのは、創価学会が一つの文化運動として政治に対してきちっと物申すという態度を示した段階ぐらいから、だんだんとマスコミが騒ぎだすのです。それが最終的に大きな形になって一気に爆発したというのが、たぶんこの「言論出版問題」だったのだろうと。簡単に言うとそういう話になると思います。ただ安直な評価づけとか、安直な感想は軽はずみにできないのですが、いずれにしてもそういう存在になったということだけは言えるだろうと。社会のなかで大きな存在になった。これは創価学会自体、また会員の一人ひとりが自覚をしなければならぬ。そういうものだというふうに思えます。あくまで僕の個人的な意見です。公式な見解ではありません。それで、「言論出版問題」を通じて、僕たちも自分自身で考えなければいけない問題がたくさんあるように思います。

この間も、アメリカのピッツバーグ大学で池田先生の研究をしているチルソンという准教授が

まいりましてね。彼は敬虔なクリスチャンなのです。それでいながら、池田先生の何を研究しているのかとチルソンさんに聞いたら、池田先生のリーダー論なんです。リーダーとしてどれだけの人をきちっとリードしていったのか、その運動のありかたなんです。その運動を研究したいといって、日本に来られたのです。研究所にも来ていただいて、いろいろな書物とか、いままでの研究をみていただいたのですけれども、その時に彼が一言ぼつりとした発言がすごく面白かった。それがどういう発言だったのかというと、「創価学会に対しても、池田先生に対しても、きちんとした研究は一つもありませんね。すべてジャーナリストが行った研究です。ジャーナリズムの研究、ジャーナリストがやった研究というのは、必ず意図がある様に思えます。こうしたい、こういうふうにみせたい、こう読ませたいという意図があるのではないのでしょうか。それは本格的な研究ではありません。だから自分が本格的に研究しようとした時に、そういう研究があまりにも少なすぎる。これはどうにかなりませんか」と僕たちに言われたのです。けれどもどうにもなりませんね、これは。ですから、それは僕たちがその研究をこれから一つ一つ丁寧に積み重ねていくしかない。だからこのジャーナリズム、逆に僕たちの方の、創価大学の方でジャーナリズムを研究している先生にもお願いして、ジャーナリズムとこうした一種の宗教運動、ジャーナリズムと一般大衆の文化運動。それがどういう形で、どういうふうになっていくことがもともと重要なのか。また、それがどう評価されるべきなのか。そういうことをきちっと研究していただく必要があるのではないかと、思っています。それを踏まえうえて、現在の創価大学のありようを考えていく必要が出てくるのだろう。その一つのきっかけがおそらく、この「言論出版問題」の研究なのだろうと思います。これは昭和45年ですから1970年で、おおよそ40年前なんです。創価大学ができる前後の事件です。ですから、その意味でも創価大学が創立されていく、そして先生が教育というものに、ものすごく力を注いでいく。それとこの「言論出版問題」、あるいは政治の運動の問題、これがどうつながっていくのか、あるいは全くつながっていないのか。つながっていないことも考えられますから、これを僕たちは研究していく必要があるのだろうと思います。ただ、如何せん資料がない。いままでの研究の蓄積もない。だから言ってみるとその研究はいまから始まるわけです。この段階になって、やっと一歩踏み出せるのだ、ということのように思います。

特にこの歴史的な研究については、よく言われるのですけれども、だいたい人間も十干十二支が廻って還暦って言いますよね。還暦という言葉があって、60歳になると赤ちゃんに戻るとたとえられています。だから赤い「ちゃんちゃんこ」を着て祝うのですが、だいたい歴史的な事象として客観的にみられるようになるのは、60年以上経ったものではないかと言う研究者がいるのです。たしかに15年前や20年前だと、まだまだ歴史になりえないわけですよね、関係者もたくさんいるし。それから取材についても、その時の話といってもなかなか出てこなかったり、逆に15年や20年経ったいまの立場から言える言動しかないとかですね、そういうことが起こってきますので、なかなか難しいのですが、今後の課題ですね。今後の課題として、この「言論出版問題」についてはじっくりと取り組んで研究を進めていきたいと思っています。非常に大切な研究の一つだと思います。なぜかという、この創価学会の活動とか運動は、客観的に人類のなかであまりな

かった一つの運動形態だなどいつも思っているのです。これだけ多くの皆さんが、一人ひとりの自覚と一人ひとりの責任で動いていて、それで世の中がだんだん変わっていくような運動が、これまでの歴史のなかであったのだろうか。あるいは宗教というものを中心としても、そういうような集団があったのだろうかと思いますと、学問の対象として絶対に研究されるべきものだと思うのです。だから50年先、100年先の研究者になるかもしれませんが、その人たちにじっくりと研究してもらいたいと感じます。そのための資料を、なるべく客観的なデータを創価大学としては残していきたい。自分たちの都合だけで残すのではなくて、いろいろなデータをきちっと残していきたい。それをいま自分たちの使命と感じていて、その一環として僕もこの夏季大学講座で、このような話をさせていただいている。そういう気持ちでいるのです。この「言論出版問題」はやや、いままでの話の流れとは違う一つの背景になりますが、こういうことがあったなかで先生が何をされていたのかということ、これを強調したいがための一つの話として聞いていただければと思いました。

## 5. 昭和45年1学期の学園と創立者

今度は昭和45年の1学期に入ります。昭和45年の1学期、日付的に言えば先ほど示した本部総会、先生が「言論出版問題」について発言された本部総会の前月、4月8日、第3回の入学式が開催されました。この昭和45年の段階になって、中学1年生から高校3年生まで、全学年がそろった完成年度にあたります。午前10時に式典が始まりました。この式典には創立者は出席されていません。正午前に式典が終了し、玉川上水にかかっている栄光橋で記念撮影が行われました。記念撮影の終了後、午後2時の段階になりまして、創立者が学園に到着されます。真っ先にされたことは一体何かというと、新しい寮生と記念撮影をされています。そして、栄光第1寮、第2寮を訪問されました。このあたりの先生の動きとお話を聞いてみますと、親元を離れて学園に来た、その生徒たちをどうやって激励しようか、どうやって励ましてあげようかということで、一貫しています。そして親から離れて一人で生活する苦しさは自分もよく知っている。だけど、その苦しさを乗り越えていきなさい。その苦しさこそが君たちの財産になるという、親元を離れて本当に大変な生活をしている、生徒一人ひとりの激励にその時間を当てていらっしゃいます。この時のお話。「行きづまりとの戦いが人生です。その人生の戦いに勝った人が、本当の指導者です。自分の目の前にある困難の山を登りなさい。たとえ、頂上まで登れなくとも足は丈夫になります」。こういうお話をされていました。

さきほど、「言論出版問題」の話と昭和45年の話になりましたが、その後、本部総会の話までさせていただきます。本部総会が終わった後、6月9日、創価大学の建設用地の視察をされて、また学園に戻ってこられます。そして、学園構内を散策されたり、テニスコートで高校2年生と懇談していただきました。高校2年生のある生徒には、「君たちは、野獣の如き体力、月光の如く輝く英知と、太陽の如き明るさ、闊達さ、パッション（情熱）を持たねばならない」と話されました。また、別の生徒たちには、「今日は、学園生の皆さん方に会って、本当に気持ちがいれば良かったです」とおっしゃっています。先生は自らの心情を率直に生徒たちにぶつけられているよ

うに思えます。さらに次のような会話もあったようです。先生はある生徒に家族のことを聞かれました。その生徒はお父さんを亡くされていたようです。「父は亡くなりましたが、父の分まで成長してがんばります」と応えた。それに対して先生は、「君がきっと成長し、お母さんに親孝行すると約束してください」と。親孝行のお話は、最近の大学での卒業式、入学式でも触れられていますが、この段階ですでに、真っ正面から生徒たちにおっしゃっておられるのですね。

翌月7月の17日には、第3回栄光祭が開催されました。ここにも創立者はご出席されます。先生は、キャンプファイアを囲む全体集会に出席され、夕刻は参加者と会食会を催していただきました。その席上のお話です。先生は次のように語りかけてくださいました。「創価学園では通信簿の点が非常にからいかもしれない。うちに帰って通信簿を見せる場合には、たとえ悪い成績の人であっても、『創価学園は非常に秀才の集まりでたいへんなんだ。こんなに悪くてもほかの高校や中学校からみればトップ級である』と、このようにうまく父兄に言っていきなさい。中学生、高校生にとって最大の関心事は、やはり成績なのですね。それをよくわかっておられ、配慮してくださっています。そして、続けて「父兄の人たちを安心させてあげてもらいたい。親や兄弟に心配をかけるような表現をするということは、それだけ余計に自分も苦しみ、父兄を苦しめてしまう。それは結局、親不孝です」。学園のこの当時から、やはり先生は親孝行のこと、親のこと、家族のこと、それをずっとお話しをされています。この親孝行というのは、全ての基本だ、ということでしょう。これもまた創価教育の一つの筋道かもしれないと最近、私たちは思うようになっております。さらに、この栄光祭の先生のご指導でございますが、『心配ない』というひとことで、自分も一念三千の法理からまた強く進むであろうし、父兄も心から安心するでしょう。寮生に対してだと思われませんが、「きっとさびしいことやいやになること、それから辛いことなどあるかもしれないけれども、さらに誇りをもって、胸に未来の大きな虹を描きながら邁進していつてもらいたい」。こういう指導をしていただきました。7月ですからみんな故郷に帰るわけですね。ですから、「ともあれ元気で帰ってきて、8月の末には校長先生をはじめ諸先生方に、希望と喜びに満ち、また勉強にとりくんでいくという姿をみせていただきたいと思います」と、栄光祭の日のお話しをくくっておられます。

## 6. 昭和45年の夏の出会

さて、この昭和45年の夏の出会、というところから完全に私の個人的な体験になってくるので、だんだん声小さくなったり早くなったり、感情が揺れ動きそうで怖いのですけれども。7月の23日、7月の17日が栄光祭でございましたので、それからおよそ1週間後です。東京未来会という未来部の人材育成のグループがありまして、その「第2期の結成式に出席」と、『年譜 池田大作』という本に書いてあるのですね。ところが同じ日程で、先ほど、昭和44年、箱根での話をしましたが、それとほぼ同じ日程で臨海学校と林間学校が実施をされておりました。この昭和45年の7月の臨海学校に私も参加をさせていただきました。ちょうどその未来会の結成式と、それから学園の臨海学校の行事が重なったのですね。ですから、先生は昼間には、未来会の会合に出席された。我われの方は、着いた時に先生がいらっしやっているかどうかは知らされませんで

した。私たちはただ海に入って、泳いで騒ごうみたいな話だけでした。当時、臨海学校の一大行事に、遠泳がありました。2キロの遠泳をやるのですね。私にとっても初めての経験でした。学園に当時、非常に怖い体育の先生がいらっしやましてね、大塚先生という方です。僕たちは「大塚プレス」というあだ名をつけて。プレスはプレッシャーの略称ですね。この先生を中心に遠泳をやるのですね。だからもう怖くて怖くて。それが最大の関心事だったものですから、先生がまさかおられるなんて思いもしませんでした。臨海学校に参加したら、先生がいらっしやる。この時にも、新聞の記事にはなっていないのですが、先生との個人的な会話がいくつかありました。それを紹介します。

まず1つ目は、2日目の夜なのですけれども、先生が仕事をされているお部屋の前に庭があるのですが、そのお庭に呼んでいただきました。じゃがいもの蒸したものや、トウモロコシ、それからスイカを、本当にたくさん出していただきました、「ほら、みんな食べなさい」と言われて。座って食べるのではなく、皆立って食べていたのです。そうしたら、先生が一人ひとりの顔を確認しながらですね、にこにこ笑って学園生のところを歩かれて来られました。ところが僕の前に来られたときに、ピタッと止まられて。それまですごくにこやかだった先生の表情が、ガラッと変わったのですね。その印象が強かったので、思い出として残っています。先ほど触れました、1年前の箱根での池の先生のお姿というのは、すごく優しかったのでよく覚えていないのです。しかし、この時は非常に厳しい視線でしたので、僕自身は忘れられません。先生が僕の目をじっとご覧になっておっしゃったことは、「いつまでも学園に甘えていてはいけません。母校を守っていきけるような人になっていきなさい」と厳しく言われました。そのお話を、僕はどういう意味なのだろうと、本当に真剣に考えました。僕はどういう点で学園に甘えているのだろうか。甘えているとすればやはり甘えていちゃいけない。どこで甘えがあるのだろうか、と。その甘えを越えていく力が母校を守っていくことなのだろうか、ということで、この中学3年生の夏ぐらいからですね、どうすれば母校のために役に立てるのかと真剣に考えるようになりました。つまり、この昭和45年に先生にお会いして、臨海学校の時の先生のこの一言で、大きく一つの物の見方が、個人的には変わりました。つまり学園をみる視点が、ぐっと高い所になり、学園全体をみて、これはどうすべきなのだろうというようなことを、毎日じゃないのですけれども、時々考えるようになりました。今から振り返れば、初めて学園のことを、客観視できるようになった。したがって、学園をどうすればよいのかという、ある意味で、自分の責任で考えられるようになったと言えるかもしれません。

僕の家はその当時、東京の練馬にありまして、練馬から学園までおよそ2時間近く通学時間が、かかったのですね。そうすると朝5時半に起きなければなりません。朝5時半に起きて食事をし、それで学園に行くのですけれど、早く着いても8時半ぐらいでした。授業が終わってクラブをやり、5時半、6時半になって家に帰ります。そうすると8時とか8時半なのです。食事をしたら9時を回ります。それから宿題をやらなければなりません。その頃、僕はある先生から特別な宿題を出されていて、当時『聖教新聞』に掲載される『人間革命』の全文を写す作業をやっていました。原稿用紙に全部、そのまま写し直すのです。文章の勉強になるから、それはや

るべきだということで、中学2年生の頃から先生が毎日毎日『聖教新聞』に載せてくださっている『人間革命』を写しました。写しているとおもしろいことに、だんだん先生の文章の癖がわかり始めてくるのです。そうすると、ある一つの章が終わりそうだというのが写していて、わかってくるのです。「きっと明日、あるいは明後日にはこの章は終わるな」というのがわかってくるのです。

この作業は、一切の宿題が終わってからですので、なかなか大変でした。写していながら、知らない間に寝ていたりですね、書いている鉛筆の頭に、ガツッとぶつかったりですね。下手をすると1時、2時まで原稿を写していました。2時までやると5時半に起きなければ間にあいませんので、だいたい睡眠時間が3時間から4時間。中学生の間は、そういう生活をしていました。それで母親が、書いた原稿用紙が宝物だということで、ずっとダンボールにしまっておいてくれたのですが、最終的に段ボール2箱ぐらいになりました。その意味では非常にいい訓練だったと思います。年をとってからではないとわからないのですが、本当にいい訓練をさせていただきました。文章を書く。文章によって人に何か伝えるということは、すごく重要で、難しい。そのことを、中学生の時に教えていただきました。

そういうことがありましたので、この『人間革命』の筆致、先生がどうしてそうした書き方をされるのか、ということですが、お気づきになっている方もいらっしゃると思いますが、先生は『人間革命』のなかで、例えば「一人ひとり」という言葉を使う際に、必ず上側が「一人」と漢字を書かれるのです。その下が「ひとり」というように平仮名になっています。「一人ひとり」は漢字と平仮名になってつながっていくのです、次の文章へ。写す作業の中で、こうしたことに気がつきまして、何で先生はわざわざこうして「一人ひとり」というふうに、上を漢字にして下を平仮名にするのだろう、という疑問を持ちました。先生にお会い出来るチャンスはそうありませんし、その頃質問会が多かったので、どこかでそれを聞きたいと思っていたのです。そうしたら、この臨海学校で、ちょうど先生のそばに誰もいないで、二人きりになった時がありました。「あ、チャンス！」と思って、怖さも何もなく、先生に、「先生、どうして先生は『人間革命』のなかで『一人ひとり』という表現をされる時に、上は漢字で下は平仮名にされるのですか」とお聞きしたのです。知りたかったものですから。これが2つ目のことです。そうしたら先生は、真剣な表情で「私はね、作家です。だから、いろいろなことを考えながら書いているんだ。その最も大切なことは、読者のことを考えて、どうすれば読みやすいかを常に考える。それが作者の役割なのですよ」。こういうお話を、してくださいました。そして、「一人ひとりというのを漢字と平仮名で書くのは、山本周五郎、吉川英治というような作家の手法でもある。そういう人たちの小説をちゃんと読めば、同じ方法だということが分かる」。こういうお話をしてくださいました。その時に「本は自分でもたくさん読んでいるつもりだけれども、そこまできちっと読んでないのだな」と痛感いたしました。その時に教えていただいたことで、本の読み方も、また、『人間革命』の写し方も変わっていきました。

この臨海学校は、三崎で行われましたので、近くには城ヶ島があるのです。その海岸で「有名な詩人がその城ヶ島のことを詠っているのだけれども知っている人はいますか？」と、創立者

が、生徒に質問をされました。それに答えられず、がっかり落ち込みました。自分の不勉強さを、創立者に見抜かれたような気がいたしました。その答えは白秋なのですけれども。「白秋だよ」と教えてくださり、続けて「じゃあ秋は何色だ？」とわざわざ聞いてくださったのです。大きなヒントが出ているのですが、それにも気づかず、答えられなかったのですね。先生が少し悲しい表情をされたように見え、とてもつらかった記憶があります。「白い秋だから白秋だろう」と言われて、一生忘れられません。白秋だけはずっと頭のなかに残って残っていて、「秋は白い、秋は白い」と覚えさせていただきました。そうしたことがありました。

それから、先生が出発される時にお見送りをさせていただきました。3日目の日に。僕たちは早くから、門の所に出ていたのですけれども、いろいろな方がいろいろな仕事をされていたのですね。先生が出て来られて、そのいろいろな準備をしている人たちのところまで連れて行ってくださって、「いいか、みんなよくみておきなさい。陰でこうやって頑張っている人がいるから、みんなね、助かっているのだよ。この、陰で頑張っている人のことを決して忘れてはいけない」。こうしたことも教えていただきました。その時の口調も厳しく凜としたものでした。あとから考えてみると、なぜ中学生にそこまで真剣に語られるのか。この年になってみると思うのですけれども、完全に一個の人格として、きちっと大人に言うような話し方で、がっちり打ち込むのですね。だから、たぶん中学生の方も心に残るのだらうと思います。それが、単に子ども扱いで、子どもは子どもなのだからここまで言うとおけばいいだろう、こういうふうに言うとおけば分かるはずだ、ぐらいの、そういう取り組み方であれば、おそらく僕はこの時の話、この3つの話は覚えていなかったかもしれません。しかし、先生が本当に真剣にみえたものですから。視線が急に変わるのですよね。経験された方が何人もいらっしやると思いますが、その視線が変わって、バシッと言われるものですから。それはすごく残っていて。そうして話していただいたことが全部、自分の宝物になって刻みつけられました。それがいまでも本当に生きています。そういう指導をしていただきました。

それから、先ほど言いましたようにその頃私は通学生だったものですから、寮に入っていたわけでもなく下宿にいたわけでもなく、家に帰れば母親がご飯を作ってくれ洗濯もしてくれていましたので、非常に楽だったのですね。ところが寮生は洗濯も自分でしなければいけない。食事本当に粗末な食事だったのです。いまだから恨み辛みを言えるのですけれど。寮生たちに聞いたら本当に、年柄年中腹が減っていたと。それを訴えたらある先生が、「良いのだよ、空腹は最大のごちそうなのだから」と。「何を食べてもおいしいだろう」と。彼らは一生懸命寮で生活していました。僕自身はその時どういう発想をしていたのかというと、未来部の、特に中等部の活動などについては、寮生ではできないのだから、それは自宅生の自分がやるべきだ。学園生としてきちっとやるべきだ、というふうに思って、中等部の活動は一生懸命やっていました。地元の会合も決して1回もさぼらずに真剣に行っていました。

ちょうどこの昭和45年の夏に、中等部の第1回総会が開かれるということになりまして、その前後に、大きな催し物をやろうという企画が出ていました。当時、少し遡りますが、昭和45年の4月12日に、東京都の台東体育館、その頃よく本部幹部会等で使っていた会場なのですが、そこ

でこの中等部の大きな大会を開こうではないか、ということになったようです。これらはあとから幹部の方にお聞きしてわかったことなのですが、その大会で、先生からいただいた「大いなる希望」という詩に対してのレスポンス、中学生に対してくださった先生の詩に、中学生自身が応えていく。その意気込みをみていただけるような、何かそういう催し物をやろうということで、中学2年生から中学3年生にかけての春休みに、いろいろな練習が始まりました。それが最終的にこの第1回中等部総会にまでつながっていきました。中学2年生の1学期は『建設の一年』を作るのに、謀殺されました。中学3年生の時には、総会での催し、タイトルは「ヤングヤングジャンボリー」という大きな行事のなかの「21世紀への歌声」というミュージカル、その中心的なメンバーにさせていただきました。練習をひっきりなしにやっておりました。挙句の果てには、司会の原稿まで全部僕が書きまして。よく信濃町の青年会館に、夜中の1時2時まで残ってですね、管理人のおじさんおばさんに怒られました。「あんた中学生のくせにこの時間に何やっているの！」と怒られたのですけれども、僕のそばには中等部の幹部がいましたので、その人がさらに怒られていました。そういうようなことでこの夏休みは、この中等部総会のためにずいぶんいろいろなことをさせていただきました。この時に創立者をご出席されて、この「ヤングヤングジャンボリー」を開催することができました。8月17日のことです。「ヤングヤングジャンボリー」を昼間の0時40分から開催をいたしまして、皆でわいわいやったのです。

実は後日談になるのですが、全国の中等部員が、この催しのために一生懸命に練習をしてきているのです。私の家内が大阪の中等部員として参加していたのです。その大阪の演技は何かというと、河内音頭でした。かなりの人数の中学生が、輪になって河内音頭を踊るのです。踊ってぐるぐるぐるぐる回るんですよ。練習のときには3回くらい回転して終わる予定だったのです。本番になっていつまでたっても終わらないのですよ、大阪の人たちが。なぜそうなったのかということをお聞きしたら、先生をご出席になられるということで、少しでも河内音頭をみていただきたいということで、ずっとぐるぐる回っていたというのです。でも河内音頭が終わらないと先生のご出席がないわけですね、あとから考えれば。そういうプログラムだから。でも大阪の中学生が本当に真剣になって先生のご出席までね、頑張るといって回っていたということ、結婚した後に聞きましたね。

これもなかなか面白い後日談なのですが、その時の東京の参加者はユニフォームを着ていました。そのユニフォームを着ている中学生が、うろちょろしているわけですね。先生も初めはご出席になる予定ではなかったそうですが、先生が車で回られると、いたるところでそのうろちょろが目についたそうです。先生も途中から、「何か面白そうだね」とおっしゃったそうなのです。それで最終的に、ミュージカルを見に行こうということになり、出席していただけました。会合の最後に、中等部の代表で私が「会長就任10周年」のメダルをいただいたのです。中等部の仲間たちから、「何で君だけが？」と恨みのようなことを言われましたが、僕は本当にありがたくいただきました。その時に先生から「お、君か」と言っていただきました。約1ヶ月前に厳しいご指導を受けていますので。まさにその時は指導を受けたすぐ後でしたので、顔をきちんと覚えていただいて、激励をいただきました。そういうことで、この昭和45年の夏は、一方で「言論出版間

題」があったわけですが、僕自身にとっては非常に大きな転機となる夏だったのですね。

その中等部総会での先生のご指導は、「今は人生の礎を築く時である」「友情、同志愛を育み進もうではないか」、それから「忘れるな、正義と信念」という話をされています。これは、中学生にむかってここまでご指導されるのだ、と感じるものでした。私の手元にその時のご指導の切り抜きがあるのですけれども、それを見ますと次のようなご指導なのです。「責任ある人に育ってほしい。自分でやらなければならないことは、どこまでも責任を果たしていく。そうすることが、諸君が大きく育ち、重要な立場に立ったときに、どれほど社会の信頼を得ていく力となるか計り知れない」。こういうお話を中学生に、本当に真剣にされるんですね。いまの若者や大人に対して言われてもおかしくない指導なわけですね。それを先生は本当に真剣に中学生にむかってされるわけです。もう一つ先生がここで強調されたことは、「反戦」です。戦争は絶対に反対だ、そのことを君たちは忘れてはいけない。戦争はいかなることがあっても2度と繰り返してはいけない。そのことを再三にわたって先生がおっしゃっておられました。「戦争の問題について一言しておきたい。諸君のなかにはテレビや映画などを通し、兵士の闘う姿をみて、あるときは格好いように思うことがあるかもしれない。また、戦争反対ということに対し、実感がわかないこともあるであろう。しかし、実際の戦争というものは、非常にむごたらしく、悲惨、残酷なものである」。こういうふうにおっしゃっています。「これは私ども、ならびに諸君の両親が骨身で感じ取っていることであります。戦争だけは断じて避けたい。また諸君たち、前途有望な青少年に、2度と戦争の悲劇だけは経験させたくない。私は今、この決意で平和の舞台を切り開いているつもりであります」。中学生に切々と訴えられました。先生が強調されたその思いは、必ず子どもの気持ちに届くのですね。僕たちもその話を聞いていて、身にしみました。確かにその当時、テレビ番組で「コンバット」という戦争の物語、アメリカの兵士がかっこいい戦争番組がありましたけれども、「あ、先生のお気持ちはここにあるのだな」ということを知りました。そこで知っておくとですね、先生の戦争に対する後々のご指導が筋を通して理解できるのですね。ですからこの時も思ったのですけれども、先生はいかなる相手に対しても、真剣に話をされるのだと。

よく僕たちは「平等」ということを議論します。「平等」、「平等性」というのはなかなか確保できません。もともと性的な、男性と女性という性別もありますし、育った環境もあるし、顔も違えば家庭環境も違う。全部違って、平等というのは本当に難しいわけですね。平等のなかでいくつかの平等があるわけですが、生命をもっているという平等、これも平等ですよ。これはわかりやすい平等ですが、僕が創立者に感じるのは、どの人間に対しても同じように対等に話をしてくださり、対等に話を聞いてくださる、というその平等性なのです。世の中の大人のなかに、中学生に対して真剣に自分の人生をかけて、何か話をするということがあるだろうか。その時にそういうことを感じまして、私自身ダイレクトにそれを受け止めるべきだと思いました。ですから僕がいま心がけていることは、実際に大学で教鞭をとっていますが、自分の教え子に対してはとにかく真剣に、学生を一人の人間としてわかってもらいたい、わかってもらいたいし理解してもらいたい。そういう姿勢できちっと話をしない限り、話というのは絶対に突き刺さらないし理解してもらえないのだ、ということです。このことを、創立者のお姿から学ばせていた

できました。ただ、時々うまくいかない時がある。うまくいかない時に、「あ、これじゃいけない」と気づかせてくださるのが、こうした先生のご指導であると感じています。この点も、創価教育の基盤になる大きなポイントの一つだろうと思います。

## 7. 昭和45年の秋と冬

昭和45年の夏休みが終わりました。9月の1日になりますと、真っ先に行われたのが創価女子学園の起工式です。大阪の交野ですね、現在の関西創価学園が建設されるところです。そこでの起工式が行われました。学園生の代表50名がそこに参加をいたしました。この時の参加者に聞いてみますと、本当に毎日毎日、寮歌の練習をしたそうです。寮歌を徹底して練習したみたいです。寮歌というのは、現在の学園の校歌ですね。「草木は萌ゆる」です。当時は寮歌でした。学園の寮歌が校歌になった転換点は昭和58年です。学園が初めて甲子園に出た時ですね。そのあと、「近鉄バッファローズ」という球団に入るようになった小野君、小野和義君がサウスポーで、江夏の2世だと騒がれた時に出了ました。1回戦で負けてしまいましたが。相手は、京都の東山高校という学校だったのですけれども。負けた時に、もし勝って校歌が流れたら、全国の学会員の皆さんは、学園の校歌だとわかっていただけるのかな、という議論になりまして。皆さんがご存じなのは寮歌だろう。だったら寮歌を校歌にしようということになり、その時以来「草木は萌ゆる」が校歌になったのです。それまでは寮歌です。この「草木は萌ゆる」を、関西の女子学園の起工式で大合唱したようです。先生が、この寮歌の合唱を非常に喜ばれた。いままで聞いた寮歌のなかで最高の寮歌だね、というお話しをされて、終了後、参加した学園生と記念撮影をしていただきました。その時の一言。創業者は学園生に対して、「君たちが私の誇りだ」。こう言っていたいただきました。「君たちが私の誇りだ」。そこまで先生に言っていたと血が騒ぎますね。それで参加した学園生たちは意気揚々と帰ってまいりました。

1日に関西の学園の起工式があって、そのあとすぐ、およそ1週間後の9月の9日、再び先生は学園を訪問されています。こうやって話してくると本当に頻繁に来られていますね。先生が学園に行かれる時、朝、奥さまが先生のお顔をみて「あなた、今日は、学園に行かれるんですね」とお聞きになった。「どうして、わかったんだい」と先生がお尋ねになったら、「そりゃあ、わかりますよ。学園に行かれる日は、朝から楽しそうにしていらして、いつもと違いますもの」とおっしゃったという有名な話がありますが。あの頃は学園に行かれることが本当に楽しみになっていると感じます。

9月9日は、「潮流会」という通学生の組織がありましたが、758名、当時ちょうど中高6学年で、758名の通学する学園生と懇談をして下さいました。それまでは親元を離れてきた寮生と下宿生を中心はずっと激励をされてきて、僕たち通学生はさみしい思いも多少はしていたのです。やはり親元から離れているから、僕らの友だち、寮生下宿生は大変だから、それは先生から激励を受けるよと、どこかで納得しているところもありました。だけれど、通学生も一生懸命、朝2時間、放課後2時間かけて通っている。でも家に帰れば父親と母親がいるし、寮生の方が大変だ、と自分で納得させていたのですが、寂しさは否めません。そういう気持を察してか、この9月9

日は通学生のための会合に先生が出席をしてくださいました。そして翌春卒業予定の高校生と中学生、すなわち高校の1期生と中学の1期生と、クラス別に記念撮影をしてくださいました。昼間はそういう形で通学生と話をされるのですが、夜にはやはり寮生と懇談をしてくださるわけです。親元離れてということ、先生は本当に愛しく思われたのでしょうかね。いまになってみると、この年になってみると、わかりますよね。自分の子どもが中学生で、まだ小さい時に、親元を離れて行くのですよ。僕の、ある北海道の親しい友人のお母さんが、北海道から自分の子どもを学園に送り出したのですね。その時に校長先生に、「もしかして、北海道と本州が違う国になった時には、よろしく願います」と。もしかしたら、北海道が独立させられた時には、とにかく先生よろしく願いますと言って帰られた。そのぐらい心配するのですね、親というのは。それは僕らがやっとこの年になってわかるのですが。先生はそういう子どもたちを非常に大事にしてくださいました。学園の正門に入ってすぐ左側のところに、「英知・栄光・情熱」という碑があるのですが、その前で先生と一緒に、卒業生ということで記念撮影をしていただきました。いま、創価大学で副学長をされている寺西先生と同じクラスだったのですが、当時、寺西先生はずっと坊主頭だったのですね。だから、いつも僧侶と間違えられてかわいそうだったのですけれど、この時だけはちょっと毛が伸びていました。毛が伸びていた寺西先生をみた創立者が、「お、なんだか伸びているね」とおっしゃったのを覚えています。指さして毛が伸びていると。一人ひとりの生徒、特に寮生の毛が伸びたの伸びないの、そういうことまで先生がみてくださったことがわかります。それから、いま関西創価高校の先生になっている渡辺君も一緒でした。兵庫県の出身で。この人も本当にのんびりした人でね、本当に何を言っても怒らないのですね。のんびりしているんです。そのかわり何か忙しい時にも絶対に急ぎません。彼が中心になって、関西で僕ら中学校1期の同窓会を毎年開いてくれていまして。いままで全然同窓会に出てこなかった人たちもだんだんと我われぐらいの年齢になりますと、ちょっと会いたいなという気持ちになって、今年も夏に開催したようです。関西学園の夏季大学講座の時期に合わせて皆、集まってくるのですね。この同級生のなかには、残念なことに、病気で亡くなった方も何人かいらっしゃって。やはり時というのは、そういうことも生じさせるのだな、と感じます。亡くなった友人の分も、僕らはいろいろなことで頑張っていかなければいけないと思っております。いろいろな説があるので、僕らの時は食生活が悪かったですからね。僕らの学年で病気になって亡くなる方が多いというのは、中学校の時の食生活じゃないのか、などと言いながら、皆で笑って話したりするのですが。

この9月9日の潮流会の、自宅生の会合の第1回総会の時に、先生が、このような句を詠んでくださいました。「友のため 世のため 光れ 潮流会」「潮流に あと20年 天下春」。こういう歌を詠って激励してくださいました。絶えず20年先、30年先、そういうことを中学生、高校生におっしゃっているわけです。20年先目指して頑張れ、20年、30年先、とにかく立派になっていってほしい、そういう先生の思いが、いたるところにちりばめられているのですね。この時に潮流会でも質問会がありました。僕は今回、様々な勉強をさせていただきましたが、この潮流会の時の質問会は秀逸です。よくぞ高校生、こういう質問をした。また先生がそれに対して本当にガッ

チリ答えてくださっている。その質問の一つ。「『生きる』ということとは、どういうことでしょうか?」。こういう質問をするのですね。高校生ですよ。いま50代の僕がしてもおかしくない質問ですよ。生きるということとはどういうことでしょうか。学園生は、やはり考えているのですね。多感な時期だったからかもしれません。それで創業者が、「簡単にいえば、『生きる』ということとは、生きて生きて生きぬくことであり、最高の生命尊重です」と答えられた。生きるということとは生き抜くことなのだ。「一個の生命がいかに大切であるか。何にでも生きようというものが本性にあるし、これは本能であり、自然の摂理です。万物の靈長である人間が、生きて生きて生きぬこうとする原動力が妙法です。それでは何のために生きるのか。これは仏法の規範の一つの定義から言えば、自分自身の所願満足のためです。これはエゴイズムではなくて、人生において最大に充実したものをさすのです」。先生が学んでこられた仏法の哲理からの話をこう高校生、中学生にされるのですね。「社会にどれだけ貢献し、自分自身も自分の心境も自分の家庭もどれだけ自分としては満足し、有意義におくっているかということです。これが、自転、公転にたてわければ、いわゆる自転です。公転としては社会に自分は悔いのないなんらかのことをした。そういう生き方が、生きると言う意味です」。これは非常に大事なご指導だと、いまさらながらに思いました。「社会に自分は悔いのないなんらかのことをした。そういう生き方が、生きると言う意味です」。これは高校生、中学生だけではなくて私たちにとっても非常に重要な一つの法則性を教えてくださいと思っています。この先生の話をよくぞ当時の学園生が聞き出してくれたと思っています。もう1回言います。「社会に自分は悔いのないなんらかのことをした。そういう生き方が、生きるという意味です」。非常に重要なご指導ですね。

それからもう一つ秀逸な質問がありまして、これはこういう質問です。「父が2年前に亡くなりました。でも今はこういう立派な学校に入れていただき感激しています」。立派ですよ。お父さんを亡くされて、学園に通って来て、その学園生が先生の前で堂々とこう言うのですね。「立派な学校に入れていただき感激しています。母にどういうふうに報いていけばよいか教えてください」。こういう良い質問なのです。素晴らしい質問ですね。いま大学生、創大生がこれを質問したとしたら、僕はもう感激で泣きだしますね。素晴らしい質問だと思います。創業者はそれに対してどう答えたのかというと、「気持ちも質問も非常に真面目ですね。下品、中品、上品という3種類の親孝行があります。下品の親孝行とは子どもが奴隷みたいになって、親の言うことばかり聞いていることをいいます。中品の親孝行は、偉くなって、いろいろなことをしてあげるという普通の親孝行ですね。上品の親孝行は、妙法を唱え広めていくことで、どんな親孝行よりも崩れない親孝行です。したがって、センチメンタルにならないでお母さんやお父さんに題目を送ってあげる君になっていけばいい。それから身体を健康にして人よりも余計に働いてお母さんを幸せにしてさしあげなさい。それがもう世界一の親孝行です。それは時期がこななければできない。あわてないでいきなさい」。こういうご指導をされました。本当に親孝行の本質中の本質をついた、そういう先生のお話だったと思います。

それから最後3つ目の質問なのですが、こういう質問をいたしました。「『人間革命』のなかに、英雄の3条件の一つに、清き知恵とありますがどういうことでしょうか?」。創業者はこういう答

えをします。間髪を入れずに、「本当に知恵がある人は、時を知っています。それがわからないのは一番愚かなのです。私たちはいま勉強する『時』だ。金もうけをして、うんと遊ぼうなどという『時』ではありません。そんなのは墮落です。『時』が違う。苦難をのりこえて勉強すべき時だ。私は『時』ということをおしやっただけです。いま、英雄なんかになる必要はない。勉強が第1だということをおしやっただけです。こういうご指導でした。

昭和45年の秋のこの質問をみて、当時こういうぶつかり合いが、学園生と創立者の間にあった。本当に自分たちの人生そのものをぶつけ合って語りあう、まさに師匠と弟子の語らいがここにあったと思います。実際に僕もそこにいたのですけれども、この質問会のやりとりがほとんど記憶にありません。ただひたすらに先生の姿をみていたのではないかなと思います。ただ一つだけ、この上品、中品、下品の親孝行の話は、親孝行に3つあるということを知りまして、ちょっとドキッとしました。自分がいまだどういう親孝行をしているのかということをご自分で考えましたので、このことだけは覚えていました。それ以外はほとんど頭に残っていません。いま振り返ってみるともったいないですね。自分が覚えていることを皆さんにお伝えするという事しかできないのですけれども。

この時の創立者の挨拶、最後のまとめのご挨拶です。「本当に遅くまでありがとうございます。また会おうよ。その時にまた諸君の元気な姿をみせていただきたいと思います。私の生き甲斐はもうそれしかないのです。こうおっしゃっていました。そして、「10年たった場合、20年たった場合、または死ぬ寸前の時に、この中学校、高校で学んだことや、友だちになった人のことが、生涯で一番尊く、一番美しくそして一番思い出になることを確信します」。こう言われました。10年経ったときに、また、20年経ったときに、また死ぬ寸前に、この中学、高校で学んだことが一番の尊い、そして一番美しい思い出になっているはずだ、なっていてもらいたい。これが先生の思いだったのです。この先生の思いの通りに自分は生きられているのだろうか、毎日を送っているのだろうか。それを考えます。一人の人間として。これは死ぬまで忘れられないことなのだろうと。ああ自分のあの時、あの学園で学んだことが一番美しかったのだなということ。でもいま考えてみますと一番苦しかったのですよ。人生繰り返していい、と言われたらどうするか。学園に入りません。あんな苦しい思いをするぐらいだったら、という気持ちもどこかにあるのです。けれど、やはりこの先生の思いをみると、ああ、あの苦しさをもう1回味わおうか、と。本当に泣きながらへろへろになりながら活動していましたからねえ。本当に眠くてふらふらになりながら通っていました。でも、その先生の思いがここに示されていると思います。それから昭和45年の後半になってくるわけですが、9月の9日に通学生との会合をもつていただいてから2週間後です。今度は「秋の夕べ」という催し物で、学園の寮生と下宿生の集まりに先生は出席してくださいました。いろいろな角度から、通学生を激励し、今度は親元から離れている寮生、下宿生を激励するという。縦・横・斜めから、もういたるところに手を尽くして、自らが高校生中学生を育てよう、20年後、30年後を目指そうという先生の意気込みが、このスケジュールからみて取れます。僕はその渦の中にいましたが、わかりませんでした。そんな事は全くわからない。親の心、子知らず、とはよく言ったもので、親の心が全然わからなかったです。それが、いまになってみて少

しずつ理解できる様に思えてきました。親の気持ちが少しずつわかってきた。そういうものなのかもしれません。教育って難しいですね。いま自分で子どもを育ててもそう思います。全然自分の思った通りに行かないです。悲しいことですが、難しいです。

10月の5日に創価大学の設立審議会に出席をされまして、翌11月の2日、創価学園で第1回の「鳳友祭」が開かれました。「鳳友祭」というのは、いわゆる文化祭です。学園祭です。これが開かれまして、先生はありとあらゆるところを回られて、バザーに行くと、生徒たちが作っているものを食べたりですね、作品をご覧になったりしていました。我われは、先生に食べていただきたい一心でいろいろなものを作ったのですが、学園の先生たちはハラハラしていたそうです。何か悪いものが入るのではないかと。これは運営サイドに回ると必ずそうございまして。創価大学にも「創大祭」というのがあるのですが、学生たちがクラブごとにいろいろなバザーをやるのです。作り方をみると、食中毒がでなければ大成功という、そういう作り方なのです。ですから学園の先生方は心配していたみたいです。何人かの生徒にその場で会われて、そのたびに創立者は激励をされました。例えば、ある生徒には、「君たちは、師子のような逞しさと、闊達さをもって、妙法を土台として、それを自由自在に使っていきける人になってください」。また、ある学園生には、「若い時の苦勞は、後になって必ず自分のためになるんです。私は、君にどんな苦しい立場になっても、堪えることのできる勇敢な人になってもらいたい」。こういう激励もされます。様々な激励をしてくださったわけで、それが一人ひとりの学園生の生命のなかに刻みこまれていく、ということの繰り返しでございました。

11月の28日、創価大学の建設用地を視察されます。翌年、創価大学が開学なのです。昭和46年が開学の年ですから。建物も急ピッチで作られていきますし、その当時の文部省への大学の設置の申請もしなければならぬ、ということで、時折『聖教新聞』に大学の建設の状況が写真で載っています。これは別の時にまとめてお話をします。今日、大学をご覧になっていただければわかるのですが、一番古い建物が、ブロンズ像が立っている建物、「A棟」というのですけれども、ロビーを入っていきますと奥にエレベーターがあります。開学時は建物が、あのエレベーターまでしかなかったのです。ですから、いまのA棟の半分しかなかった。本当に小さなキャンパスから始まったのです。そのキャンパスの視察を11月28日にされています。

12月20日、もう年の瀬も押し迫った段階で先生は学園を訪問されて、寮生と下宿生との会食会に臨まれました。皆さんのなかにはお聞きになった方がいらっしゃると思うのですが、この時に「学ばずは卑し」、学ばないものは卑しいのだ、という話をされています。本質的な話が、この昭和45年は次から次へと学園生になされていて、これは学園生の生命のなかに根本的な法則といますか、そういうものを叩き込むのだという、先生のその意気込みが伝わってくるように思えます。この時のご指導は、「指導者として、また先端を行く人間として、学ばないというのは卑しいことです。国家や、人類や、社会など、また真実の人間観を深く探求して生きる人の、一番正しい、一番偉大な言葉であると、私は心ひそかに思っております」。学ばないのは卑しい。先生が、有名ではないけれども私が偉い人だと思っている人、その人のモットーだということで紹介をしてくださった話です。学ばないことは卑しいことである。「いまの政治家とか、いまの指導者

とかはだいたい学んでおりません。その証拠に、青少年の心を知らない。学んでいません。もう卑しいことです。諸君は学ばずは卑しいということを、知性の人間として、次代の指導者として忘れないでもらいたいと思います」。こういうご指導なのですね。学んでいないということの基準は一体何であるか、ということが先生の一言中に示されています。先生がおっしゃる「学ぶ」とは一体何であるのか。それは青少年の心を知る、ということです。先生は、学んでいないということの証拠に青少年の心を知らない、だから成長しないのだ、とおっしゃっているわけなのです。青少年の心を知ることが、学ぶということの重要な一つの要素なのだというを示されているのです。この、青少年の心を知るといことは本当に難しいです。僕たちは少なくとも学生とつきあう機会が多いのですけれども、話し込むと本当に勉強になることがあります。これも先生が時々おっしゃいますが「教師は教え子から学ぶのだ。教師は学生から学ぶのだ」。よくおっしゃいますけれども、本当にその通りだと思います。この、青少年の心を知る。何がしたいのか、何を目指しているのか、何を悩んでいるのか、何を苦しんでいるのか、そういうことを一つ一つ知っていくことが、実は私たちにとっての学びであって、人格としても人間性としても、それをやらない限り卑しくなっていくのです。卑しい人間になっていくのですよ。そうであってはならないというご指摘なんですね。そうおっしゃっておられます。さて、12月の20日、先生は「とにかくみんな、お父さんお母さんによろしくね。それで、いい年を迎えてください」ということで、会食は終わっています。

## 8. 学園1期生の卒業と創価大学の開学

やっと創価大学の話になっていくのですが、年が明けまして2月の11日に創価大学の竣工式が行われました。先ほど言いました初めての建物A棟の半分ができて、そこで竣工式が行われました。竣工式に先生はご出席されて、創価大学の一つの方向性として、こういう話をされました。「創価大学は楽しく伸びのびとした大学として、社会の繁栄を担う包容力ある人材を輩出して行ってほしい」。現在の校舎の前に「出発（たびだち）の庭」があるのですが、お帰りになる時にご覧になっていただければわかるのですが、そこに桜が1本あります。A棟前のロータリーで、一番A棟寄りに、ロータリーの道路に枝が出ている桜があるのですが、この桜が昭和46年の2月11日に、創立者が植えてくださった桜です。キャンパスを何回か訪れた方はご存じだと思うのですが、創価大学のキャンパスのなかで最も早く咲く桜の1本です。先生もそれをご存知で、先生が本部棟と桜の木を撮られた写真があると思うのですが、その桜こそがこの起工式の時に先生が記念植樹をしてくださった桜です。先生は、この当時、創価大学に来られると、必ず帰りに学園に寄られるのです。この2月11日も学園を訪問して3月卒業の中学生、高校生の代表と懇談をしてくださいました。

この夏季大学講座でのことを、短大の石井学長と話していたのです。短大の石井学長は高校の1期生です。石井先生と僕はいろいろつながりがありまして、石井先生が創価高校の野球部の初代のキャプテンなのです。僕が創価中学校の野球部の初代のキャプテンなのです。キャプテンつながりなのですね。だから、すごく馴れ馴れしくさせていただいている、非常に仲の良い、大

好きな先輩の1人でして。石井さんにそういう話をしていたら、「いやあ神立君、その2月11日にね、僕はその会合に参加しているよ。先生がおっしゃった一言がずっと残ってるんだ」と話してくださいました。それは、こうしたお話だったそうです。「飛ぶ鳥、後を濁さずです。このあととは自分たちでしっかりと考えてやっていきなさい」。だから、後を濁すような卒業の仕方はしてはならない。卒業した後を濁さないということ、それは、このあとのことは全部自分たちでやっていくのだ。そういうことを指導されたのではないかと石井先生はおっしゃるのですね。それが石井先生のなかに刻みつけられたのですね。その話を是非とも皆さんにしておいてください、という石井先生のリクエストなのでお伝えしておきます。そういう形で激励をしていただいたようです。

このあと創価大学が初めての入学試験を実施いたします。当時の入学試験は、2月の19日に法学部、2月の20日に経済学部、2月の21日に文学部。初めての入学試験が実施されました。1日目の法学部の受験者数は2,460名、倍率12.3倍。すごいですよね。それから経済学部、受験者数2,983名、倍率14.9倍。15人に1人しか受からないのですよ。多分いまの僕はだめですね、受けても。文学部、2月21日、2,382名の受験者。倍率は23.8倍。もう言葉をなくしますね。私立で開学をする大学の、初めての入学試験でこれだけの受験倍率になった大学はないそうです。この当時、創価大学が開学するというので、いろいろな人たちやマスメディアから、いろいろなことを言われ、いろいろなことを書かれています。良い部分もあるし、まあ興味だけで言っている人たちもいる。下衆な推測をして書かれてあるものもある。そういう人たちが固唾を呑んで見守っていたのが初めての入学試験で、どれくらいの受験者がいるのかという話なんです。当時の職員の方々に伺うと、本当に準備が大変だったそうです。何もなかったのですから。4学年が全部そろって職員の方もそろそろ。しかし1年目ですから、本当に職員の数が少ないわけですよね。だけれど入学試験の業務は4年間そろっているのと同じですよ。4年間そろっている事務職員の数で、それで運営されるべきものが、その1年目に対応した職員の数しかありませんから本当に大変だったと言われていました。駅で受験生を案内するのも大変だったし、当時のバスはずっと遠回りだった。16号線で、左入というところがあるのですが、左入から古い滝山街道を回って、こちらの丹木3丁目まで来ましてね。丹木3丁目から善太郎坂を上がってきて、それで大学に来たのですね。正門はありませんから。

1期生は笑って言われるのですけれど、正門ができたのは開学6年目なのです。だから1期生と2期生は裏門から入って裏門から出ていった。3期生、4期生、5期生は裏門から入って正門から出ていったのです。まともに正門から入って正門から出て行ったのは6期生からなのですね。だから1期生、2期生は裏の道という。3期生はそれを茶化すかのよう「我々は本門の1期生だ」と威張るわけですね。3期生の正木先輩たちがそうおっしゃっていました。

合格発表がありました。2月の25日、26日、27日です。それぞれ法学部313名、経済学部363名、文学部204名、このおよそ1,000名弱の皆さんが栄えある創価大学の1期生になったわけです。当然このなかに、皆さん良くご存知のアメリカ創価大学の羽吹学長、創価大学の田代理事長、馬場副学長等々の1期生の先輩たちがいるわけです。公明党の北側さんも1期生の1人です。

先輩たちがこの段階で創価大学の受験をいたしまして、当時は推薦入学がありませんでしたので、学園生も入学試験を受けました。でも、さすがに高校1期生はすごく優秀で。高校生はいつも成績順のクラス分けでした。成績の良い人から1組、2組、3組、4組って並んでいくのです。ですから6組が一番成績が悪いというのは、誰からみてもわかってしまうのです。その6組のなかで一番成績の悪い先輩がどういう人生を歩むかということ、一浪して早稲田大学に入学される。そういうレベルだったのですね、高校1期の先輩たちの実力は。だから、アメリカへ行ってPh.D.をとってくる。もちろん様々なご苦労はあると思うのですが、下地は出来ていたのですね。その当時、超優秀な未来部の人たちが、皆学園に行きましたからね。その意味では非常に活気のある学園生活だったと思います。先生たちも若かったし。山本学長も当時23歳。それで本当に力をいれて教えてくださいましたからね。非常に思い出深いものがあります。

大学の入学生が決まった。それはとりもなおさず創価学園から第1回目の卒業生を送り出すということになるわけで、高校の1期生、中学の1期生が卒業することになりました。中学の1期生は卒業してもそのまま学園に残るわけですから、何の感慨もありません。またこの3年間が続くのだ、というような感想を抱いていただけですね。もう本当に何とかしてもらいたいという感じでおりましたね。厳しい先生方に温かく見守られてですね、あと3年だ、と思っておりました。高校生は外の世界へ羽ばたいていくわけですね。

卒業式は昭和46年3月の15日です。高校の卒業生309名、中学の卒業生210名です。この519名が卒業いたしました。創立者は卒業生に対するメッセージを贈られています。そして、卒業式の式典が終了した後の、謝恩パーティーに出席して激励をしてくださいました。

本日は、いろいろな学園生と先生との交流を聞いていただきましたけれども、今日の結論をいまから述べたいと思います。それはこの高校1期生の卒業に際して先生が贈ってくださったメッセージです。先生の思いが全てここに入っている、と言っても過言ではない、そういうメッセージでございます。「この希望の月に創価学園第1期生として学窓を巣立ちゆく諸君に対し、私は心から『おめでとう』と申し上げるものです」ということから始まりまして、「諸君に望みたいことは、この3年間、折りにふれて話をしてまいりましたように、人間らしく、自分らしく生きてほしいということです。これだけが、私の祈りともいうべき願いです」。つまり、生徒一人ひとりが、人間らしく、自分らしく生きること、これが先生の念願だということですね。人間らしく、自分らしくというのは、結構難しいです、自分の個性のままに生きるというのは、でもそれが、私の祈りともいうべき願いですと、おっしゃっています。続けて、「けっして背伸びする必要はない。外面や体面だけを考えて自分を飾る必要もありません。そうした虚構の人生だけは歩んでほしくないのです」。こう言われました。そして、「真実の人生とは何か。自分らしく、個性豊かに進む人生でありましょう」。ですから、一人ひとりが自分らしく個性豊かに進む人生。それこそが真実の人生なのだ。こういう明確な定義づけです。また、「人生においてもっとも尊いものは何か。自分の信ずる道を、だれがなんといおうと、胸を張って堂々と貫いていくことに尽きるでありましょう」。これは大人に向かって言われている言葉じゃありません。大人の人たちに、それも何かの会合で言われているのではなくて、高校生が卒業する時の贈る言葉なのです。それを前提とする

と、非常に重要なことを仰っておられると言わざるを得ないですね。未来に向かう青年たちへの、熱いメッセージなのですね。さらに続きます。このご指摘も胸に迫ります。「学校で学んだことが教育のすべてではありません。アメリカの自由思想家、エマソンは『小学校、中学校、大学で教えられることは教育ではない。教育の手段である』。だから、大学で教えられることは教育じゃなくて教育の手段だ。いわゆる一種の方法にすぎない、きっかけにすぎない、ということなのですね。『教育の手段である』とっておりますが、諸君が受けた教育の真価は、諸君の人生に臨む姿勢で決まるということですよ。自分たちの受けた教育が何によって決まるのか。それは卒業生一人ひとりの人生に臨む姿勢で決まる。本質中の本質ですね。そして、こう先生は言われました。「私は、諸君の見事な成長を信じております。諸君の成長を至上の楽しみとしています。21世紀の命運は、ひとえに諸君の双肩にかかっていることは間違いないからです」。本当に本質的なお話だと思います。そして、「不信と断絶を越えるもの——それは深い哲学に基づく人間性の絆しかないことも明瞭であります。どうか、創価学園第1期生の自覚を生涯忘れることなく、大樹と育ち、栄光に満ちた人生の大道を歩んでください」。これが卒業生に対する先生の思いだった。1期生を送り出す時の、贈る言葉になっています。

## 9. むすびにかえて

まとめに入ります。僕自身が高校を卒業して大学に入学したのは、1974年、すなわち昭和49年なのですね。今日はそまでお話をしようと思っておりました。ですが、今年も1年半しかできませんでした。毎年、自分の過去に縛られつつ、思い出し、涙をしながら、泣きながらやって来たのですけれども。

むすびにかえて、ということで中間報告的になりますが、創価教育、実践の場としての創価学園、創価大学の歴史、これは語り継がれていく必要があるだろう。必要があるだろうと言っているのは皆さんに対してではなく、自分自身で語り継いでいく必要があると思ったということです。やはり、学園と大学で学ばせていただいた私たちが語らなければ、残っていかないと、先生の思いは伝わっていかないと。50年、100年先に、先生の思いがきちっと残るのだろうか。残るのだろうかと言っているはいけないのですよ、残さなければいけない。そのために自分自身が語るのだ、というふうに自分では決意をして、本当に恥ずかしいのですけれども、まさに清水の舞台から、創価大学の屋上から飛び降りるような気持ちで、話をさせていただいたわけです。

創価教育研究所で毎年3月に研究紀要を出しています。この研究紀要は、研究所の所員である先生方を中心に、様々な研究やその成果を一つの冊子にして出しているのです。昨年、この夏季大学講座で話させていただきました「創価学園・創価大学と創業者（第1回）」も、手を入れて、きちんとした形で全文載せてあります。ですから、今日の話の前段階は『創価教育』という研究誌に載っています。もし興味があればみただければと思いますよ、そういう何かの形で残そうと思っております。今日の話も、できれば来年3月に出る『創価教育』の第4号に載せていただけたらな、と思っております。残すことが一つの使命だと感じていて、その準備をまた秋口から始めたいと思っております。

草創期の創立者のご指導に創価教育の根幹が示されている。まさに草創期、本当に数少ない生徒たちに全魂込めて先生がしてくださった指導が、やはり創価教育の根幹の一つなのだろうと思います。今日皆さんに聞いていただいた通りです。創価教育の特色、これは先ほどの創立者の創価学園1期生への卒業メッセージに込められておりましたが、創価教育の特色、それは学生の生きる姿勢で決まる。人生の歩みで明らかになる。したがって、学園と大学の卒業生は自らの生きる姿勢というものを絶えず問うべきである。そして、人生の歩みをしっかり考えていくべきである。これは人に言っているのではなくて、自分に言い聞かせている、ということなのですけれども。また、僕らはそういう覚悟で学生を育てなければいけないということです。価値の創造、平和の創造、それこそが創価教育の最大の目標です。価値を創造する。何の価値を創造するのか。それは人間の価値です。人間の生きる価値です。人間の生きる姿勢です。そのなかから生まれてくる価値、それを創造すること。それが創価教育の最大の目標なのです。価値を創造と言っても、これは人がやってくれる事ではありません。自らのモチベーションで価値を創造していく以外にないのですね。自分が前向きになる以外にないのです。自分が後ろ向きの時に、価値は創造できない。その意味で、価値を創造するというのは、困難があっても苦しいことがあっても辛いことがあっても、絶えずそれを乗り越えていく、朗らかにそれを乗り越えていく力を発揮していくことなのではないかと考えます。そういう力をもった一人ひとりを育てたい、また育ててほしい。また自らも育てていく、それが創価教育なのではないか。そういう人たちがたくさん出てきた時に、おそらくさらにその上に、平和の創造というのが、初めてできあがっていくのだと思います。

以上、とりとめもない、私の体験を中心にした話でしたけれども、本日は本当にありがとうございました。以上でございます。